
『たちかぜ』と二等海士長～DDG168『鋭き剣』～

二等海士長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『たちかぜ』と二等海士長〜DDG168『鋭き剣』〜

【Nコード】

N7294F

【作者名】

二等海士長

【あらすじ】

【注意】この物語はあくまでフィクションであり、作者は実際に艦魂が見えたという事実は有りません。

護衛艦「たちかぜ」最後の乗員の一人であった二等海士長と、「たちかぜ」の艦魂『たちかぜ』がどの様に出会い、別れたのか。未来の無い艦艇とやる気の無い自衛官の話。私自身の苦悩と挫折の話です。作者の主観・考察が話の大半を占めております。小説とは言い難いかもしれません

第0話：希望モ見エズ夢モ無ク（前書き）

ようこそ「たちかぜ」へ

本日はようこそ「たちかぜ」に御乗艦下さいました。乗員一同心から歓迎申し上げます。

「たちかぜ」は、コンピュータを駆使した「たちかぜ」型最初のミサイル艦であり、空、水上及び水中から脅威に対して迅速に対処し得る能力を有しております。

艦長以下乗員一同、皆様の心ゆくまでご案内いたしますので、ご不明な点は何なりとお尋ねください。このたびの御乗艦が皆様の良き思い出となれば幸いです。

たちかぜ艦長

2

艦名「たちかぜ（太刀風）」の由来

太刀風とは太刀を激しく振るにつれて起きる風のことです。

建造造船所・三菱重工業長崎造船所

就役・昭和51年3月26日（1976）

全長（m）・143.0

最大幅 (m) ・ 14.3

基準排水量 (ton) ・ 3,850

軸馬力 (HP) ・ 60,000

最大速力 (Kt) ・ 32

乗員数 ・ 236

搭載武器 ・ 5インチ砲 x 1

20ミリバルカン砲 x 2

ターターミサイル発射装置 x 1

アスロツク発射装置 x 1

3連装魚雷発射管 x 2

チャフ発射装置 x 4

第0話：希望も見えず夢も無く

私に何を語る権利があるろう？

語る権利など無い。

ただ、伝えなければならぬ事がある。

正面きつての戦いだけが戦いではない。

国を守る戦いは常に続けられているのだ。

2005年

舞鶴

海上自衛隊舞鶴教育隊

第15期海曹候補士課程

4月7日

入隊式予行

ザワつき、落ち着かない新兵にいらついた教育副部長が怒りを爆発させた。

「貴様等、今日が何の日かわかっているのか!？」

何の日か？

『入隊式予行の日だろ?』

等と言う声が聞こえたが、
教育副部長の答えは予想の遙か上・・・衛星軌道ぐらいまでカッ飛んでいた。

「今日はなあ、戦艦『大和』が沖繩に特攻した日だよ!」

教育副部長の言葉に啞然とする我々・・・。

「『大和』が沖繩を救う為に死地に赴いた日だ!
そんな日に何をふざけているんだ!！」

知らんがな。

同部屋のK学生は後に

「『エライ所に来てしまった』そう思った。」
と、語った。

そう、海上自衛隊はエライ所なのだ。

「じっ・じゅ、うう〜！」
『50!』

廊下に分隊50人が並べられ、腕立て伏せをやらされる。

一人10回数えの・・・計500回。

無理である。

力尽きた者に蹴りが当たる。

「くっそ・・・！」
辞めてやる！
絶対辞めてやる！

0555

総員起こし5分前
目を覚ます。

0600

総員起こし・起床

1分で服を着て30秒で5階から1階に駆け降り、屋外に30秒で並ぶ。

「第32分隊！総員50名事故1！事故の内訳、列外1！現整列員50名！」

「体操かかれ！」

「掛ります！」

5分間体操を実施。

体操終了後、直に食堂へ。

駆け込む、掻き込む、走り去る。

隊舎の5階に駆け昇る。

すぐにベットメイク。

教務の準備、プレスのかかった作業服に着替える。

0730には支度を終え、行進練習を始める。

『しれーい！』

おはようーございーますッ！！』

『おはようございます！』

曹候の死にそんな大声にあわせ、総員が挨拶をする。

教育隊司令は

『おはようー！』

良く通る声で挨拶をかえす。

0800

国旗掲揚。

海上自衛隊は土日も旗を掲げる。

分隊長が副司令に報告する。

「第21分たーい！」

「第31分隊！！」

「第、32分隊！」

「第41分隊。」

「第、42分隊ッ！」

分隊長の報告にもクセがそれぞれある。

スウ

副司令が息を大きく吸い込む。

「課業に、かかれえー！！」

1キロ先まで届く大声で号令がかかった。

ようやく、課業開始である。

「疲れたぜ。」

朝から疲れた。

当然、午後の課業整列等もあるが、書くのにも疲れた。

疲れていた。

掃除中に窓の外に白い影を見たり（詳しくは【ある組織の日常、非日常】をご覧ください）、

延灯の帰りに海上自衛隊第1体操をする『ナニか』を見たりした。

短艇ダビットで少女の声を聴いたり、

「そういう時は、気分転換だよ。」

寝言王ことビッグ窪がそう言った。

土日、

上陸時の服装は制服である。

上陸開始時間も決まっております、0800、1000、1400の3回であった。

海上自衛隊の教育隊で上陸開始時間が決まっているのは、艦艇から上陸する際、錨泊していたら内火艇による上陸となり、内火艇運航時間は決まっているからだろう。

余談だが、ビッグ窪の寝言は凄まじい。

『まだ若いから』

『んもーう』

『あぶくま、しまかぜ、こんごう、ましゅう』

等と寝言を垂れて同じ部屋の者を爆笑させていた。

それはさておき、

私はいつも通りに商店街に向かった。

プラモ屋を眺める

「お、二式飛行艇」

「ん？航空戦艦。」

二チモの『伊勢』と出会った。

ラポールというスーパー……の前のホビー店にて、

「デリンジャー」

8ミリBB弾使用のデリンジャーを買った。

「何を買ってきてんだよ！」

『伊勢』を組み立てていたら、突っ込みが入った。
当たり前か。

教育後半は端折ります。

愉快的仲間達のお陰でなんとか教育隊を修了できた。

護衛艦に乗ったり、潜水艦を見学したり、トンプソンの射撃を見たりした。

私は船務航海科要員としての教育を受け、2分隊隊、電子整備に進んだ。

本当は航空機武器整備に行きたかったが、定員に空きがなく、

「お前、顔が『電子整備』っぽいから電子整備に行くか？」

という分隊長の言葉で電子整備にしたのだ。
どんな理由だよ。

兎にも角にも、私は教育隊を修了した。

これは自信になったのだが・・・。

「『たちかぜ』・・・。」

フライデーにて報道された問題艦に配属される事になってしまった。

2005年8月10日、夜

私達は『たちかぜ』に到着。

同行は確か4人。

新兵は全部で27人乗り込んだ。

そして私は・・・

「え？」

「君は1分隊。CDSだから。」

CDS？

ナニソレ？

いきなり絶望する羽目になった。

2分隊・船務航海科の教育を受けて来たのに、1分隊・砲雷科・CDSという、ガテン系分隊の得体のしれぬ部署に配属されたのだ。

「27人・・・か。」

『たちかぜ』は続々乗り込んで来る新兵達を眺める。

誰も彼も不安そうな顔をしている。

（彼達を一人前・・・いや、半人前にする事が出来れば上々だな、）

『たちかぜ』は自分に残された時間の短さを知っていた。

次回に続く。

第0話：希望も見えず夢も無ク（後書き）

W E L C O M E A B O A R D

The officer and crew of "TACHIKAZE" extend to you a hearty welcome aboard!

Our ship was commissioned as first computerized ship of "TACHIKAZE" class in Japan Maritime Self Defense Force (JMSDF) and possesses a strong capability for quick response to Air surface and submarine threats.

We as members of this JMSDF destroyer hope that you will enjoy your visit and take back pleasant memories with you

Commanding Officer

TACHIKAZE means the wind which occurs when Japanese winds win

第1話：下つ端（前書き）

昭和

52年度

『機関優秀艦』 『射撃優秀艦』

53年度

【優秀艦】 『対潜優秀艦』 『機関優秀艦』

54年度

【優秀艦】 『対潜優秀艦』

56年度

『射撃優秀艦』

57年度

【優秀艦】 『射撃優秀艦』 『機関優秀艦』

58年度

『艦内防禦優秀艦』 『体育優秀艦』

60年度

『艦内防禦優秀艦』

62年度

『艦内防禦優秀艦』

63年度

『給食業務優秀艦』

平成

2年度

『射撃優秀艦』

3年度

【優秀艦】 『艦内防禦優秀艦』 『機関優秀艦』

4年度

『海洋観測業務優秀艦』 『艦内防禦優秀艦』

5年度

『4 護群語学優秀艦』

6年度

『体育優秀艦』

7年度

【優秀艦】 『4 護群給食業務優秀艦』 『4 護群艦内防禦優秀艦』

4 護群術科競技（艦内防御）優秀艦』

8年度

『4 護群術科競技（情報）優秀艦』 『4 護群術科競技（機関）優秀艦』

9年度

『4 護群術科競技（機関）優秀艦』 『4 護群術科競技（艦内防御）優秀艦』

10年度

『機関優秀艦』

11年度

『保存整備優秀艦』

12年度

【優秀艦】 『保存整備優秀艦』

15年度

『給食業務優秀艦』 『体育優秀艦』

16年度

『1 護群術科競技（機関）優秀艦』 『術科競技（機関）の部優秀艦』

17年度

『術科競技（機関）の部優秀艦』

注・

4 護群Ⅱ 第4 護衛隊群

1 護群Ⅱ 第1 護衛隊群

第1話：下つ端

下つ端にできる仕事と言えば、ペンキ塗り、皿洗い、お茶汲み。

誰にでも出来る事だ。

ペンキ塗りには数種類ある。

内部デッキ（艦内の床）、内舷（艦内の壁）、外舷、外部デッキ、外舷・・・

外舷が2つあるが、これは艦橋等の構造物を塗る外舷と、艦・船体を塗る外舷の2種類が有るためである。

船体を塗る外舷は『塩ビ』と呼ばれていた。

私費で買わされた青いツナギに着替えてペンキ庫に行く。

『塩ビ』は18L入りのペンキ缶に入っている。使う前によく掻き混ぜる。

使う時はデカイ缶のまま使わずに、元々内部デッキが入っていた500ミリL程の容量の缶に入れて携行する。

『塩ビ』とは塩化ビニールであるから、筆を洗う時はシンナーを使う。

ペンキ庫の中はペンキやシンナーの臭いが充満していた。

「ひどい臭いですね」

「シンナー吸いたくなったらココにすれば良いよ」

先輩海士がハハハ、と笑う。

「外舷って言えばよ」

作業長・FOG3曹が昔話をしてくれた。

外舷の錆汁を塗り潰したは良いけど、塗った場所だけが綺麗になっていたから変な縞模様になった艦艇があった。

「しかも観艦式の時だけ」

「ハハハ。迷彩効果が出ますね」

『笑い事じゃ有りませんけどね』

「あれ？」

「どうした？」

「いや、なんか声が聞こえた気が・・・」

「わけわかんねえ事言ってねえで、仕事だ仕事」

・・・

『試運転を行う。
警戒員配置に付け。』

出港前には1時間程、機関試運転を行わないといけない。

中部甲板員は内火艇を1隻降ろして警戒に当たらせ、前部甲板員は碇を宙釣りにする。

後部は・・・分からない。多分、防舷物を出して警戒したりはしていたな。うん。

「『ゆき』は楽しそうだよな」

『たちかぜ』は右軸の前進と後進、そして左軸の前進と後進を試すのだが、

『『しらゆき』、試運転開始』

『ゆき』クラスからはスクリューが可変式であり、軸の回転が一定であつても前進・後進をスクリューの角度で切り換えできる。

つまり、おとなりの『しらゆき』は『たちかぜ』の半分の時間で試運転が終わる。

これは非常に有利だ。

『『しらゆき』試運転終了。』

引き続き、本艦が試運転を行う。』

後は30分位ガラガラと……。

「錨鎖を跨ぐんじゃねえよ！」

「？」

FOG3曹の怒鳴り声の方に顔を向けると、錨鎖びちつせを跨いだらしい髪
(仮)2士が蹴られていた。

「……不憫なやつ」

ちなみに、髪(仮)2士は2ヶ月後には辞めていた。

更に付け加えると、新兵27人中、3日で一人辞めていた。

『試運転終了。』

「試運転終了ーっ」

幹部が一々放送を繰り返してくれる。

「了解ーっ！」

「右外舷異常なーし！」

「左外舷異常なーし！」

『別れ。』

出港準備、艦内警戒閉鎖。

航海当番配置につけ。』

出港準備、艦内警戒閉鎖、航海当番配置につけ・・・

その名前通り、出港準備を整える号令であり、この3つの号令は殆どの場合がまとめて掛けられる。

出港準備は各部署の人員配置状況を確認（試運転の時とはほぼ同じ配置）して、もやい綱を放つ準備をする。

警戒閉鎖は『警戒閉鎖』を行う。

艦内閉鎖は『警戒閉鎖』と『非常閉鎖』があり、『警戒閉鎖』は通常航海時に事故が起きた場合に備える閉鎖で、

まだNBC攻撃や通常型ミサイル等での攻撃による被弾や火災、浸水には備えていない状態だ。

よってからして、通風口やウィングのハッチは閉じない。

『非常閉鎖』は合戦準備がかかると実施しなければならない。

正直、面倒臭い。

出入港部署で2番（左）見張りな私は、サクッと受け持ちの艦内閉鎖を実施して、パートで着替えてから左ウィングに向かう。

自分のパートの2CICからラッタルを上がり、CICに出て航海

用レーダーを見ている航海科員の先輩方と挨拶を交して扉を開く。左手にトイレ。左斜め前に扉。真ん前には下に降りるラツタル。

私は左斜め前の扉に手をかけた。

下から登って来た海曹の邪魔になってしまったが気にしない。

扉を開けると、そこは艦橋である。

構造物としての艦橋ではなく、指揮所としての、舵輪とかあるアソコである。

軍艦に詳しい方なら疑問に思われるだろうが、『たちかぜ』のCIは艦橋と同じ甲板にあった（過去形なのが悲しい）。

対艦ミサイルを艦橋に喰らったら戦闘能力喪失・一巻の終わり……
1 艦の終わり？である。

制服に識別帽という出立ちで、左ウイングに立つ。

誰かが既に『無電池電話』をつけてくれていた。

1 2倍双眼鏡のピントを合わせながら感度チェックをする。

「艦橋、2番ふたばん」

「はい艦橋」

「2番見張り配置についた、二等海士長（仮）2士。感度どうか？」
「感度良好」

「こちらも良好」

感度チェックは至って簡単だ。

しかし、この『無電池電話』という物はどうも解せない。
何でも、声の振動で発電して音声を信号化して通話するとか聞いた
が、太平洋戦争時から有るよな、コレ？

「略帽といい、コレといい、物持ち良いにも程が……」

旗流信号が揚がったのを見ようとした私の目は、マストに釘付けに
なった。

マストの天辺に誰か居たのだ。

「あ、な、なな……」

「おい、曳索は？」

「え？ あ、……」

艦橋指揮官の声でハツとする。

慌てて見ると、丁度『曳船86』がぶつとい曳索を繰り出して、前
部甲板員が引っ張っている所だった。

「前部曳索取った」

「了解」

艦橋指揮官は少しキツイ視線を私に向けながら、艦橋内に引っ込ん
だ。

「……居ない」

再びマストを見るが、そこには誰も居なかった。

『1・2・3番伸ばせーっ！』

もやい綱が伸ばされて艦が岸壁から離れ始める。

『2・3番放せーっ！』

「よし、『出港用意』」

艦長の命でラッパが鳴る。

艦橋当番が号令『出港用意』をかけるのと同時に艦首の『日の丸』の旗が降ろされ、マストに自衛艦旗が揚がる。

1番もやいを前甲板員が引っ張り上げているのが見える。

『出港用意』・・・

実質は出港した瞬間にかかる号令だから、『用意』は無いだろ。と、ツッコミは何度もいれた。

「伝統墨守唯我独尊・・・か」

優れたモノは進化する必要が無い、とは聞くが、海上自衛隊が優れているとは思え無い。

『両舷前進半速』。

マーク半速。』

「2番了解」

速力マークをガツシガツシとロープを引っ張って変更する。

「2番マーク良し、マーク半速」

ちゃんとのマークにしたか報告する事により、間違えた場合のチエックになる。

『艦橋了解。』

・・・両舷前進原速。マーク原速。』

「何で、見張りが、速力マークを変えなきゃならんのだ！」

ちなみに、見張りが速力マークを変えなければならない”艦”は私の知る限り『たちかぜ』のみである。

姉妹艦の『あさかぜ』『さわかぜ』ですら速力マークの操作は旗甲板で航海科員が行う。

『たちかぜ』姐さんだけが見張りにやらせていた。

『水道を通る、航海保安配置につけ。』

航海保安・・・配置自体は出入港と変わらない。

違いは、やる事が出入港作業か水道航行のための安全確保かの違いだけである。

ちなみに、錨はまだ宙釣り。

「艦橋、2番」

『はい、艦橋。』

「貨物船1隻、左10度、8（やあまる＝8000メートル）、
反航。」

中国船。船名・×（仮）」

浦賀水道は艦船でこつた返す。

遠かったり、細かい目標は無視するが、大きい目標や航路上の目標
特に中国や韓国、ロシア船は別格だ。

『艦橋了解。』

艦橋から『左10度、8の貨物船は中国船。』

と、いう声が聞こえる。

と、放送がかかった。

『情報収集、^{ブラボー}B方。』

ウイングに航海科の人間が2人出てくる。
スケッチブックとカメラを持って。

『情報収集B方』

仮想敵国の艦船に対する情報収集の一環であり、主に艦影、船影を
収集する。

「うん、間違い無く『チャイ人』だ」

しばらく走ると、水道を抜ける。

『水道を出た。』

・・・別れ。

艦内哨戒第3配備、第3直哨戒員残れ。』

『艦内哨戒第3配備』

いわゆる警戒体制。

『たちかぜ』は出港すると殆んどこの体制。
3直制で各直3時間交代。

艦橋には

当直士官（副長以下）、

副直士官（准尉から2尉）。

操舵員（正規なら航海科の海曹）

艦橋伝令（1、2分隊の誰でも）、

艦橋当番（1、2分隊のカス・・・もとい、海士）

そして1番、2番見張り（カス）

これが航海直ならば後部見張り（3番見張り、1分隊の海曹）がつくが、哨戒直はレーダーを回すために3番見張りはつけない。

レーダーで見張れる、という理由もあるが、レーダー回すと運用す

る人間が必要なので海曹を見張りに立てる余裕が無いのだ。

ちなみに、『たちかぜ』の定員は250名。

私が着任した段階での乗員・・・170名余。

本当に戦争出来ると思ってるのかね？

「つーか、第3直って俺じゃん」

制服でワッチか。

嫌すぎる。

「あ？二等じゃん。お前第3直じゃなかった？」

同期のアザミン（仮）2士が話かけてきた。

「ああ！ 第3直さ！ 昼まで立つぜ、悪いか？」

「・・・俺が変わつといてやるから着替えてこいよ」

「・・・良いのか？」

有難いが。

「良いつて。早く代われ」

持つべきモノはやはり同期の仲間だ。

「有難う。艦橋2番2番見張り交代する」

艦橋の返事を待たずに交代する。

「じゃ、暫く頼む」

「任せる。でも急げよ。艦橋、2番。2番見張り交代した、アザミン（仮）2士。感度どうか」

「着替えて来ます」

艦橋内に一声かけて着替えに行った。

艦艇勤務は楽しいモノであった。

勤務は厳しくもあり、国防の現実の寒さも感じた。

人、艦、金、油、弾、
全て足りなかった。

私は人の事を言えないが、15期海曹候補士は2年で半減した。

当時の上官は

『20年以内に戦争が起きる』
そう判断していた。

そして、

戦う前に海上自衛隊は崩壊する、と。

大方の隊員は海上自衛隊に未来は無いと考えていた。

手当での削減、新規入隊者の減少。
新型艦・・・しかも大型艦艇の建造。

全て現場の人間の負担を増やす結果になった。

幕僚の中には

『出入港の時にあんなに人要らんだろう。』
とか、

『”運用”なんて要らない』
だのと吐かすボケがいた。

高級幕僚達は総じて痴呆症で、艦艇の運用が如何にキツイか忘れていた。

そのため、『むらさめ』ではCDSと電子整備を一本化してしまい、運用に失敗した。

その反省を活かし、『たかなみ』ではCDSと電子整備は再び分離したが・・・。

上級幹部に対する信用は消えた。

制服組と背広組だけでなく、
制服組の中でも艦艇勤務者と陸上勤務者、
艦艇勤務でも幹部と曹士の間には溝があった。

また、各艦や各群でもかなり温度差があり、例えば、

『当直勤務の人数を増やすから、当直が増える』

『海士の当直は4日に1度から3日に1度になり、海曹は5日に1度から4日に1度になる。』と、いう話があったのだが、1護群は

『OKです。やれまーす。』

と言い、

『たちかぜ』は

『ざっけんな、ボケ！ 殺すぞ！』

と、いう具合であり、各部隊の足並みは揃っていなかった。

『本当に戦争出来ると思ってるのかね？』

『全滅が前提なら出来ます。』

「このご時世に『撃たれるまで撃つな』って、俺達に死ねてか？」
分厚く、頼もしいが、ミサイルの破片が簡単に貫通してしまう甲板を撫でながら考えた。

「俺達や『イケニエ』だな」

撃たれるまで撃たないというのはそういう事になる。
対艦ミサイルを喰らったら撃沈確実。

「スクランブルした『イーグル』が最初に死ぬ役。
敵上陸を阻止する為に戦う海上自衛隊が最初に全滅する役。
陸上自衛隊が最後まで戦う役だ」

正直に言おう。

国防など、真面目に考えていたら自衛隊には入らない。

政治家か外交官になっていただろう。

私は国防なんて『どうでも』良かった。

しかし、そんな私に何故か・・・

士官食器室

「・・・誰だ？」

士官室係の仕事を終え、おにぎりを作っていた私の目の前に20才
くらいの女性が立っていた。

「あゝ、やっぱり見えてる」

状況が掴めない私。
慌てる『女性』。

何故か、私の前に彼女が現れた。

この出会いが、後の人生を狂わせた。

次回へ続く

第1話：下っ端（後書き）

前書きにあるのは『優秀艦』に与えられるシンチユウのプレートがありまして、『たちかぜ』が得たモノを書きました。どんなモノか見てみたい方は自衛艦を見学なさると良いかと思えます（火星明楽先生のサイトの【艦魂同盟録】中にも一応上げてあります）。

第2話：『シャー・ソド』（前書き）

1分隊

射撃

5 吋砲の操作を行う。 出入港時の配置は前甲板。

射管

C I W S の操作を行う。 出入港時の配置は・・・後甲板？

5 1 C

ターターの操作を行う。 職种的には射管。 出入港時の配置は錨鎖庫。

水測

ソナーの操作を行う。 出入港時の配置は中部甲板及び内火艇での警戒。

魚雷

三連装短魚雷（別名『俵』）の操作を行う。 出入港時の配置は中部甲板。

運用

内火艇の整備、出入港時に使う備品やペンキ庫等の管理を行う『海の男』。 出入港時の配置は前甲板。

三次元レーダー

名前の通り、三次元レーダーを運用する。 出入港時の配置は前甲板。

C D S

私のいたパート。

対空ミサイルの運用とシステムの保守整備を行う。射管（1分隊）の人間と電子整備（2分隊）の人間からなる。ために、1分隊ET（エレクトリック・テクニシャン⇨電子整備）とも呼ばれる。

CDSとはコンバット・ディレクション・システムの略。一応花形らしいが、私みたいなのが配属されるのだから誰だってやれる配置なのだろう。

第2話：『シャー・ソド』

下っ端の仕事の一つに『皿洗い』がある。
皿洗いにも種類がある。

まず、

『公室係り』

これは司令部食器室につめ、護衛艦隊司令と、司令部の高級幕僚の配膳を行う係り。

司令部があまり艦に乗らないので、船越F-10停泊中ぐらいしか行わない。

『士官室係り』

その名の通り、士官室での配膳を行う係り。
艦の士官と、司令部の幕僚に食事を提供する。

『食器室係り』

食堂の食器室で食器を洗う係り。

さて、航海中に士官室係になると、パートの先輩からオニギリを作るといふ大変重要な雑用を任された。

これは、ワッチや訓練の関係で、食事を取れない場合に備えたもので、士官室で余ったご飯を使って作る。

本当は4つ程作ればいいのだが、幹部の中にも食事をとる暇がない人間がいるので、その分も作る。

大体10個も作ったら十分だ。

「あれ？」

私はオニギリを10個作り、パートの分の4つをラップで包み、残る6つを冷蔵庫に入れた。

冷蔵庫を閉めて顔を上げると、4つ取っておいたオニギリが3つに減っていた。

「おかしいな？」

再び冷蔵庫を開けてオニギリを1つ取り出した。

オニギリ4つを持って士官食器室の出口に向き直ったのだが・・・

目の前に、オニギリを頬張る『女性』がいた。

「どちら様？」

「！？」

声をかけるとその『女性』は明らかに慌てた。

と、同時に私も慌てた。

よく考えると、『たちかぜ』には女性など乗っていない。

本来この場に居ないはずの存在がいる……。
私は慌てた。

(落ち着け！ 俺！)

私は落ち着こうと思い、

『深呼吸を3回しろ。3回出来ないなら2回でも1回でもいい。』
というのを実践した。

「あの、やっぱり見えてますか？」

「スウ〜、ハア〜」

落ち着くべく、深呼吸をする。

「見えてないのかな？」

「……見えてますよ」

深呼吸をしたお陰か、私は余裕を取り戻した。

私は相手を観察する事が出来るまでに落ち着いた。

相手は『女性』。

年齢は20歳くらいか？

海自の制服を着ていて、一佐の階級章を着けている……。

「は？ 一佐？」

「え、ええ。私は護衛艦『たちかぜ』の……」

私は『女性』の言葉を耳でシャットアウトして、無い脳みそをフル活用して考えた。

- 1、我が愛する護衛艦『たちかぜ』に『女性』は居ない。
- 2、私より少し年上のようだが、いくら何でも20歳くらいで佐官は有り得ない。
- 3、この『女性』は美人である。

以上の情報を総合すると、

イ、この『女性』は海自のコスプレした密航者。

ロ、この『女性』は仮想敵国『甲』内至は『乙』の工作員。

ハ、現実には非情である。私は頭がイカレた。

「・・・ハ、だな」

「何がですか？」

私は頭を押さえる。

「うわー、ナンバーテンだ。いやむしろマザーファッカー？
ご先祖様、遂に俺はイカレポンチになりましたよ。幻覚が見えとり
やす」

私の言葉にその『女性』は

「なんて下劣な……。つて、幻覚つてまさか私の事ですか!？」
「他に居らんわな。……。いかん、幻覚とまともに会話出来てしま
つちよる」

ギユウウ、

いきなり頬をツネられた。

「痛たたた」

「幻覚じゃ有りません！ 私は此所に確かに存在しています！」
確かに頬の痛みは本物だ。

「幻覚でありやーせんのは理解すれども、ほいならアンタは何かい
な？」

解放された頬を撫でながら訊くと、

「私は護衛艦『DDGI168 たちかぜ』の船魂、『たちかぜ』
です」

・・・フム。

「測距レーダーの直射でも喰らいましたか？」

「何で可哀想な人を見る目をするんですか？」

「だって、いきなり船魂つて……。中里の小説だけで十分だって」

有り得ない有り得ない。

「信じてくれないんですか」

「当たり前前田のクラッカー」

（何処の誰だ、こんな電波さん乗せたの？）
と、その時

ガチャ

扉が開いて砲術長が入ってきた。

「牛乳をもらうよ」

そう言つて砲術長は入つて来たのであるが、その時、自称『たちかぜ』の体をすり抜けた。

「！」

砲術長は美味しそうに牛乳を飲むと、

「ごめん、悪いけど洗っておいて。」

そう言つて流しにコップを置いて、再び自称『たちかぜ』の体をすり抜けて出ていった。

「砲術長は29歳で一尉なんです。貴方のように20歳そこそこで
一佐なんてありやせんぜ」

「いや、ツッコミ所が違つてしょ」

私は認めざるを得なかった。

「え？　嘘？　マジで『たちかぜ』？　何故に？」

私は混乱した。

さっきは相手の正体が分からずに。

今度は正体は分かったが、余計にコンガラがった。

頬の痛みやオニギリが食われている事から、幻覚ではない。

砲術長がすり抜けた事から、人間ではない。

かなり時間をかけて、私は『たちかぜ』が艦魂だと信じる事が出来た。

『たちかぜ』と私の出会いはこんなわけの分からんものだったのだ。

第2話：『シャー・ソド』（後書き）

二等

「呼び出し符諜では『金剛石の盾』とか『海の女王』っているよね。誰が誰だか覚えて無いけど。」

『たちかぜ』

「作戦行動中はアメリカとの兼ね合いから英語名で呼ばれてましたね。懐かしいなあ。」

二等

「普段は『J』^{ツン}で呼ばれてたけど、アレは？」

『たちかぜ』

「いつもMODE4を使うわけでは有りませんから。」

MODE4については次回にでも。

第3話：『たちかぜ』は悲しからずや・・・（前書き）

バ アリンの半分は優しさで出来ていると聞く。

某漫画によると世界は肉ジャガで構成されているらしい。

では、自衛隊は？

第3話：『たちかぜ』は悲しからずや・・・

自衛隊の半分は、フィクションで出来ています。

ザ・ザザ

時たま入るノイズは、艦内放送のスイッチが入っている証拠である。これから、【想定】が流されるのだ。

『状況を達する。

青国は、ユーラシア大陸東方に位置する”民主的””資本主義国家”である。

赤国は、ユーラシア大陸東部に位置する”社会主義”国家であり、近年著しい軍備の拡張を行っている。

黄国は、ユーラシア大陸東部の半島地域北部に位置する”独裁国家”である。

緑国は、太平洋東方に位置し、青国と同盟関係にある。
本艦は青国に所属する』

想定は架空の話だが、何処かで聞いたような話だ。

『X日、青国固有の領土である”Y島”が、赤国軍による武力進駐を受けた。

本艦は、邦人救出のために編成された『Y-10』艦隊と共にY島に向かう』

艦隊と言っても10隻程ですがね。

『・・・Y島周辺には、赤国『ソブレンヌイ』級ミサイル駆逐艦4隻、『漢』級原子力潜水艦2隻、『J-10』戦闘攻撃機8機が展開している』

次々と流される想定……。果たして、生きて帰れるかな？

『緊急信受信中・・・』

『横須賀警備区、防空警報『赤』発令。』

NコンB^{フラボ}ミーアット！ 対空・対水上見張りを厳となせ！』

「NコンB、三次元レーダー封止する」

電波を撒き散らす三次元レーダーが停止させられ、状況が変わるまで2分置きに2スイープだけ送信する。

逆探が頼りだ。

CICの中には会話が無い。

老朽化により役目を果たせなくなった冷却機構の為に、空気はムワットとしている。

『敵レーダー波探知！ 本艦、敵機に発見された模様！』
どうやら、敵が来やがった様だ。

持ち場であるADTI-2コンソールのPPIスコープを覗む。
スコープに筋が現れ、その先に四角いシンボルが浮かび上がった。

「目標探知！ 方位30度25マイル！」
目標位置を報告しながら目標をフックし、データを見る。

【Unknown・600Kt・190°】

『きよおーれん対空戦闘ー！』
カアン！ カアン！ カアン！ カアン！

戦闘開始を告げる警鐘が鳴り響く。

『教練対空戦闘ー！ CIC指示の目標、5インチ・ターター・
CIWS攻撃始め！！』

敵2機は対艦ミサイル4発を放った。

『たちかぜ』の能力では対処しきれるかどうかがギリギリのラインだ。

「ミサイルロードする。アサインランチャーFCSI-2！」

剥田海曹がDACKコンソールを操作し、ミサイルがランチャーに装填され、目標へと指向する様子が後部監視用モニターに映し出

される。

「発射用ー意、撃てえー！」

『ミサイル発射』（想定）

一発6000万もする誘導弾を輕輕に撃つわけにはいかないのだ。全て想定で合計3発が放たれる。

「インターセプト20秒前！」

PPISコープ上で、ミサイルのシンボルが目標に近付く。

「マークインターセプト！ ターゲットキル！」

2基、落とした。しかし、その間にも残りのミサイルが接近する。

「インターセプト20秒前！」

ジリジリとひりつく様な緊張感。

「マークインターセプト！」

「ターゲットサーヴァイブ！」

『目標、真つ直ぐ突っ込んで来る！』

『CIWSで対処する！』

ミサイルで撃墜できなかった目標に対し、CIWSでの対処が行われたが……

『目標、船体中央部付近で爆発！』

『急速探知始め！』

「2CICを見てこい！」
「行きます！」

班長の指示で2CICの被害を確認しに行く。

(船体中央部・・・か)

実戦ならミサイルを撃破しても、至近距離なら破片がふりかかる。被害が無い、という事は有り得ない。

・・・。

「2CIC異常なし！」

「遅えよバカ！」

怒鳴られながら配置に戻る。丁度、想定で被害を流し始めた。

『想定、三次元レーダー破損』

『傷者発生、2分隊・島田士長』

攻撃が止んだ・・・。第一段が過ぎたわけだ。

『ソナー探知！』

『教練対潜戦闘ーッ！』

『アスロック・短魚雷攻撃始め！』

敵潜の1隻を探知した。

『各部、動揺に注意！』

魚雷回避の為に左右に舵をきりながら、艦は敵に対して有利な位置を目指す。

『敵潜補足！』

『アスロツク用ー意、撃てエーッ！』

『アスロツク発射。』

敵潜水艦に対し、アスロツクによる攻撃を行う『たちかぜ』。しかし、まだ見付からない1隻が存在して、航空目標も居なくなつたわけではない。

「目標探知！ 方位ゼロ度24マイル！」

今度の目標は正面から突入してきた。『たちかぜ』のターターラ
ンチャーは指向できない。

『チャフ発射用意！』

『チャフよし！』

射界を確保する為に舵をきりながらチャフを撃つ。

『てー！（バン） てー！（バン） てー！（バン）』

『目標、真つ直ぐ突つ込んで来る！』

『魚雷、右舷後方より接近！』

魚雷とミサイルによる同時攻撃。逃れ切れるものではない。

『船体到大激動ーッ！』

『舵機破損！ 応急操舵始め！』

『魚雷探知！』

「つーかれたずえ〜」

テーブルに突っ伏しているのはボロボロになった私である。

食堂では疲れきった海士達が煙草を喫ったり自販機でジュースを買ったりして休んでいた。

「応急操舵、キツすぎますよ」

「仕方ないだろ。人力になるんだから」

応急操舵は艦尾にある応急操舵室に入り2人一組を作り、二組一固まりで油圧装置を動かす。

力仕事な上、応急操舵室は非常に蒸す。

「俺、もう嫌だな〜」

「この前も言ってたぜ」

いつも辞めたい辞めたいと言う同期や、先輩達と喋る。

「まあ、俺はまだ続けるけど」

「ザザ、とテレビが映る。」

「もう、そんな海域か」

「日常への回帰っすね」

同期の言うように、テレビでは平和な日本のニュースが流れてい

る。

「平和ですね」

「そうだな」

暫くの間、テレビに映る『日常』というモノを眺めていた。

「俺達・・・意味あるんですかね？」

同期がふと疑問を洩らした。

「俺達って何してるのかな？」

「訓練だろ」

訓練以外に何が有るのかと問う視線を同期に送る。

「艦隊集合に向けた訓練だよな」

「まあ、いくなれば『訓練の為の訓練』だな」

舞鶴での艦隊集合に向けた訓練だが、それが不満なのか？

「本当に自衛隊って必要なんですか？」

その時は話が飛躍しすぎだと思ったが、今ならあの時の同期の思考が分かる。

「『たちかぜ』、こんにちは」

「こんにちは」
訓練終了後、『たちかぜ』が書類を持って歩いているのに出会った。

「何かあったんで？」

「カナダ海軍でOBA（酸素呼吸装置）が発火したとの事で、スロースタートのみで使用するように達が来てます」

『たちかぜ』はかなり疲れているようだった。

ふと、考える。

今回の訓練はほとんどが『想定』だ。

訓練では艦隊の一艦として動いた『たちかぜ』だが、実際には艦隊などいない。

ひとりぼっちの『たちかぜ』

愚痴をこぼす相手すら居ないのではないか？

「なあ、『たちかぜ』……」

「そっだ、訓練終了の報告をしなきゃ。ここで失礼しますね」

光に包まれて『たちかぜ』は消えた。

「……まあ、いいか」

あまり踏み込むのも良くないし、距離はあっていい。

深夜・・・

暗闇の中、マスト灯に照らされて佇む影が一つ。

『たちかぜ』である。

「・・・フウ」

艦橋トップで、自然にため息が出る。
今度の艦隊集合における訓練予定が来た。

【標的射撃訓練】

「標的・・・」

全ては最初から決まっていた話。

生まれた時から決まっていた。 有事にでもならなければ変わら
ない定め。

「平穩無事な地獄の先に待つ、悲惨な解放・・・」

国民からは疎まれ、無視され、それでも必死に働いて・・・。

最期は家族に撃ち殺される。

「嫌だな」

標的の名前は『油船11号』。

しかし、『たちかぜ』には見えていた。
そこに、自分の名前が載る事が・・・。

「本当に・・・嫌だな」

第3話：『たちかぜ』は悲しからずや・・・（後書き）

二等

「残り半分は『理不尽』で出来ている。」

『たちかぜ』

「・・・。」

二等

「世間は金とコネで出来ている。だから俺みたいな輩でも自衛隊に入れたわけだ。」

『たちかぜ』

「・・・。」

二等

「・・・ごめんなさい。」

『たちかぜ』

「何が悪いか分かって謝っているんですか？」

二等

「4話で完結しそうに無い事と、終了予定を大幅に過ぎた事です。」

『たちかぜ』

「分かっていて何で!?!?」

二等

「……やる気がちよつと……。」

『たちかぜ』

「成敗！」

第4話：護り衛る、守られて。（前書き）

盾を守る盾がある。

矛は有りません。

でも、『矛盾』という言葉は成立します。

不思議ですね。

第4話：護り衛る、守られて。

『たちかぜ』は艦隊集合の為に横須賀を離れる。

【水道を通る。航海保安配置につけ】の放送が入り、浦賀水道航路に合流する。

「各部、艦橋。面舵回頭」

「二番了解」

何時も通りの出港。何時もの通り左ウイングにて見張りに就いていた私は、艦橋伝令からの送話を受けて何時も通り右回頭時の確認をする。

「艦尾振れ回り方向異常無し」

解説

【艦尾振れ回り方向】

回頭時に艦艇は『ケツを振る』ので、面舵回頭時は左艦尾付近を、取舵回頭時には右艦尾付近を確認せねばならない。

「相変わらず船が多いな・・・」

以前ならば、邪魔な船だと思って『C I W Sで粉碎しながら進めばスカツとするだろーな』等と言っていたが、あの船一隻一隻にも船魂がいるんだと思うと、『邪魔』だ、などとは考えなくなつて

いた。

「船魂に対してもそうですけど、国防に対する意識も変わってきたか？」

「どこからともなく現れた『たちかぜ』に訊かれたが、少し考えてしまう。」

「うーん。ぶっちゃけ、国なんかどうでもいい」

「なんですかソレは」

「ため息をついて呆れた目を向けてくる『たちかぜ』。」

「いやさ、俺は国を愛してはいるんだよ？ でも、愛した分愛して欲しいじゃん？ 見返りつて欲しいっしょ？」

「つまり、手応えが無い、と」

「そうそう、ソレだよ。打てば響くものが無いんだよねー」

自衛隊の任務は大半が訓練である。訓練成果は記録に残りはすれども、ナニかを作りだしたりすることは無い。

（俺達が必死こいて何かやっても、世の中は何も変わんねー）
全くもって生産性の無い仕事である。

「仕事を上手くこなしても、上司は『プロなんだからそれが当然』
って感じじゃん？ パンピーに至っては『余計な事すんな税金ドロ
ボー！』か『軍国主義者が侵略準備をしている！』とかって言われ
るぐらいだぜ？」

「それは一部の方だけです」

「その一部しか聞こえねえっての」

ここまでケナサレると、自衛隊は無駄を通り越して害悪なのは

？とすら思えて来る。

「国と『たちかぜ』と自分。どれが重いかって言われたら、【自分
く『たちかぜ』くく越えられない壁くく国】だな」

パキーン

と、音がした様な気がする。

「本気で言っているんですか？」

「へ？」

『たちかぜ』は、目を三角にして怒っている。

「仮にも自衛官、海曹候補士が、自分が一番大事で、国は二の次三
の次ですって？」

「ちよ、おま・・・！」

『たちかぜ』は腰の刀を抜いた。・・・やけに幅のある鞘だと思
つたら、七支刀の鞘だったのね・・・。

「制裁・・・っ！」

振り上げられた刀身が鈍く光り……

「？」

刀が振り降ろされる事はなく、『たちかぜ』は刀を納めた。

「・・・いえ、別に」

「あれ？」

『たちかぜ』は唐突に見えない誰かと話し始める。

「はい……。貴方もお気を付けて」
そこに居た『誰か』が去ったのか、『たちかぜ』はコチラに向き直った。

「……どちら様？」

「『潜水艦』の方です。固有名詞は……」

「『規則で言えない事になっている』だろ？」

潜水艦については、誰が何処にいるかという事も機密事項なので、相手が誰だか訊きはしない。

「アレがそうか」

吉倉地区から、モウモウと煙をたなびかせながら潜水艦が現れた。

一番見張りが艦橋に報告する。

「吉倉地区より潜水艦出港中。さらに後方に海上保安庁の警備艇1隻」

「艦橋了解」

ん？

海上保安庁？

「海保がなんの用だ？」

「米艦艇が出港するみたいですね」

わが社の潜水艦の向こう側、海上保安庁の警備艇を伴いながら現れたのは……。

「米……原潜！」

そこにいたのは米海軍の原子力潜水艦だった。

「アメリカさんは海保の護衛付きか」

「米海軍は私達以上に風当たりが強いですから」

自国を守る戦力に、護衛をつけなきゃならんとはね。

「それで良いのかね？」

「・・・日本が変わるには、時間が必要ですよ」

「時間ねえ・・・」

見届けずに逝くのか？ 等とは訊けるはずもなく、ただ黙って見張りを続ける私だった。

第4話・護り衛る、守られて。 (後書き)

本当ならここまでで第2話でした。

予定通りには行かないものです。

第5話：舐められていますよ、『たちかぜ』さん（前書き）

知って得セヌ！？ お下品陰語

【『ウ コ』の段々】

序列の事。序列なんぞ『クソ』みたいなモンだ、という意気が感じられるが、序列も昇進に影響するのは事実。

【『サニタリー』排出】

排泄行為のこと。

艦艇は下水処理を汚水処理槽を使って行すが、バクテリアによる分解のために限界もある。

そのため、定期的に汚物処理を行うのだが、汚物を『サニタリー』と呼ぶので、人間の排泄行為もサニタリー排出と呼ぶ者が出た。

【チ コ分のチ コ】

キッチンとした手順を踏んだやり方、を意味する。

作業や訓練にはキッチンとした手順が存在する。それを『正規のやり方』と言い、キッチンと手順に沿った作業を『正規分の正規』と呼ぶ。

で、字を置き換えて『性器分の性器』。

第5話・舐められていますよ、『たちかぜ』さん

瀬戸内海

夕方、夕風の海

皆が艦上体育に励む中、私は左ウイングで見張りについた。

「よくやるねえ」

瀬戸内を航行する船は数多く見張りは忙しいのだが、夕暮れの瀬戸内の景色と心地好い風（原速航行中）が忙しさを忘れさせる。

「忙しさではなく、仕事を忘れていませんか」

いつもの巡察中だった『たちかぜ』が、弛んだ私に声をかけた。

「忘れて無いよ。キチンと報告は上げてる・・・ん？」

『たちかぜ』と軽口を交しながら私は、視界にフェリーを捉えた。

「『たちかぜ』、あの目標どう思う？」

「良く気付きましたね。このまま行くと衝突コースです」

そのフェリーは松山からの出港船らしく、航路を横切ろうとしていた。

「艦橋、2番」

『はい、艦橋』

「フェリー1隻、左30度、120（1万2千m）。右へ進む。方位角80度」

注意するべき目標なので、艦橋への報告はいつもより細かくしておいた。

「まだまだですね」

「へ？」

うまく報告出来たと思ったのに、『たちかぜ』にダメ出しされた。

『2番、艦橋。方位角ではなく方向角ではないか？』

艦橋からも『違うだろ』というツッコミが入る。

方位角：自分から見た相手のいる角度。

方向角：相手から見た自分のいる角度。

「・・・すみません」

「何時間見張りやってるんですか？ 新兵じゃあるまいし」

『たちかぜ』姐サンは容赦がなかった。

「・・・」

私はへコミながらも見張りを続ける。

5分程して、私は再びフェリーの動静を報告した。

「先ほどのフェリー、左30度、八〇」

『艦橋了解。』

ズンズン近付くが、彼方さんは避ける気配がない。

「フェリーの船名、『オレンジヴィーナス』」

『フェリーは此方を視認しているか？』

「視認している」

フェリーの操舵室から双眼鏡で此方をみる人間がいるのが見える。艦橋から当直士官が出て来て、状況を確認した。

「此方は航路帯を航行しているんだ。回避義務は彼方にある」
だが、実際問題として回避されておらんのですよ。

「方位変わらず！ 距離1000！」

『各部、艦橋。汽笛を鳴らす』

相変わらず真っ直ぐ突っ込んでくるフェリーに対し、艦橋は汽笛を鳴らして危険を知らせるつもりのようなうだった。

ポオオオオー！

ポオオオオー！

汽笛が鳴り、此方の意図を知らせようとしたが……。

「回避しねえ！」

フェリーはそのまま突っ込んできた。

乗客が携帯の写真機能で『たちかぜ』を撮影しているのが肉眼でも見えた。

フェリーは左舷、距離は30m程しかなかった。

「艦橋、2番」

「はい、艦橋」

「フェリー、左艦橋正横変わった。30メートル」

「艦橋、3番。フェリー、左艦尾から右艦尾変わった、40メートル」

真後ろを通過したのか、後部の見張りからも報告が上がる。

『了解。各部、艦橋。艦橋了解』

ワッチ交代

休憩中、第2CIC

艦上体育後なので、みんな休憩したりシャワーを浴びたりでワッチ員一人しか残っておらず、私は機器室で座り込んで休んでいた。

「ぶふえ〜。疲れたぜ」

ニアミスのせいでひどく疲れた。艦上体育など、やる気はせん。

「んあ？ 『たちかぜ』姐サン、どうしたの？」

ふと気付くと、『たちかぜ』がボンヤリと立っていた。その表情は暗い。

「コーヒー飲む？」

「いただきます。」

まだ開けていない缶コーヒーを『たちかぜ』に渡す。

「何かありました?」

「あつたと言えはありましたが、貴方に話すことでもありません」

こうなつては、私は何も訊けない。所詮、私はペーパーの兵隊だ。我等が護衛艦隊旗艦様は階級も立場も違つのだ。

「ま、予想はつくね」

先刻のフェリーに、薄ボンヤリとだが少女の姿が見えた。

その少女は、『アツカンベ』としていた気がする。

(舐められていますね、『たちかぜ』姐サン)

いや、舐められているのは自衛隊全てだが……。

「あれ? 俺って『たちかぜ』以外は見えない筈だよな?」

いきなりフェリーの船霊が見えた理由。それは、艦隊集合の終わりに解る。

解りたくなかつたがね。

知らずにすめば幸いだつた。

第5話・舐められていますよ、『たちかぜ』さん（後書き）

二等

「次回は、大戦中に艦魂に見える人間が多かった理由にも少し触れます。」

『たちかぜ』

「簡単に言えば、戦闘の緊張感が五感と第六感を鋭敏にしていたわけですが。」

二等

「姐サン、ネタバレはやめておくんまし。」

次回更新未定。

第6話：君は国の為に死ねるか、殺せるか？（前書き）

誰かを助ける為に死ぬのは勇気が必要だが、まあ、まだ気楽だ。

家族を守る為に敵を打ち倒し、命を奪うのも、仕方なし。

しかし、我が職務には、敵を打ち倒す為に家族を殺す事も必要とされているのですよ。

第6話：君は国の為に死ねるか、殺せるか？

「アルファ・ゴルフ・ジュリエット、マイク・ヴィクター・チャーリー。ブレイクブレイク」

通信モニターの音が艦橋に響く。

略号を使用した通信は無機質で、ぬくもり生命を感じさせる事は無い。：

…まるで兵器の作動音のようだ。

「第1回、『しまかぜ』終了」

通信士が通信モニターの伝えた略号から通信内容を解読し、艦長に報告する。

それまで置き物のように固まり、『しまかぜ』を見つめていた艦長は軽く手を挙げて了解の意思を示すと、艦橋当番に令を下す。

「マイク。『第1回、『しまかぜ』終了。続いて本艦が射撃を行う』」
「マイク入れます。『第1回、しまかぜ終了。続いて本艦が射撃を行う』」

当番の音が全艦に流れた。

2006年4月

海上自衛隊は日本海において艦隊集合訓練を行った。

実施内容

特警隊による船舶への突入訓練
そして・・・艦艇射撃（実射）

本番までに艦隊は事前訓練を実施。全艦艇の意志統一を図った・・・。

「『たちかぜ』姐サン・・・。本気ですか？」

「本気も何も、命令ですから」

初めての艦砲による射撃訓練……しかも、実艦艇目標への射撃に
尻込みする私に、『たちかぜ』はアツサリと答えた。

標的は『油船』。

「本当に撃てるのか？ 仲間だろ」

私は入隊してから丸1年以上経っていたが、自衛隊の職務という
ものを理解出来ていなかった。

事前訓練の出港前の事である。

いつもの整備作業ベンキョウをするべく、私は甲板の塩をソーフで拭いてい
た。

「【海上自衛隊の天然塩】って売れないかな？」

「凄まじく体に悪そうだな」

私の馬鹿に合いの手を入れてくれたのは『パタ士長』。パタ士長は歳上の同期で、射撃管制の人間だった。

「お！ チャフ見つけ」

髪の毛みたいなアルミの加工品を拾う私を、パタ士長は呆れた風に見たが、特に何も言わずに作業を続ける。

「俺は右舷側を拭くからさ、二等は左を頼む」
「了解」

この時は確か、右舷側が岸壁だったはずだ。

パタ士長と分離して作業を続けるが、甲板は予想以上に汚く、ソーフが真っ黒になる。

「・・・洗うか」

私はソーフを洗いに中部甲板へと向かった。
金タライの水はソーフ1本で真っ黒になり、水を換える必要があった。

「面倒くせえ。・・・ん？ おゝい、水野！・・・って、逃げるな！」

同じ作業をしている水野2士が通ったのだが【何故か】逃げようとしたので、私はそれを捕えた。

「誰も捕って食やあせんのだから、逃げるな」
「す、すみません」

おどおどしながら謝る水野2士。

この水野2士は第330期ぐらいの練習員なのだが、出来がよろしくなかった。配置は射撃・・・つまり私と同じ前甲板員。

「ほら、（怒るのも面倒だから）怒ったりしてないし。水換えるからタライ持て」

「は、ハイい」

水野と二人でタライを持ち、外舷に乗り出させる。・・・今更だが、タライと呼んでるけど大鍋じゃないか、これ？

「隣の艦にかけるなよ」

「は、はいっ！・・・うわっ！」

水野よ、お前は何故にいきなり手を離すかな？

「！」

私は片手のみの不自然な体勢でタライを支えるハメになった。

（ヤベエエ！ コレを落つことしたら殺られる！）

最悪の場合、水没させてしまったりしたら潜水作業をお願いしなければならぬので私は必死になってタライを掴んだ。

必死にタライを支える私をヨソに、水野は後艦橋を指差した。

「二等士長・・・アレ」

「どれだよ！・・・？」

状況をまるで見ていない水野に腹を立てつつ、指差す方向を見る
と、

そこには、光を纏った少女達の姿があった

「どつという事だ？」

「何の話です？」

その夜、私は『たちかぜ』に詰め寄った。

「艦魂が見える人間は限られていて、見える艦魂も一人だけなはずでは？」

作業中の事を思い返す。

多数の【艦魂】が見える事は有り得ないはずだが、確かに人間ではない存在が私には見えた。

「平時ならそうです。・・・訓練を前にして、緊張で感覚が鋭敏になっっているからでしょう」

納得はいかないが、危険な訓練や戦闘中は人間の感覚は研ぎ澄まされる為に艦魂が認識しやすくなるそうだ。

太平洋戦争中の軍人達が多く艦魂達と交流出来たのも、そういった理由で多数の艦魂を認識出来たためらしい。

「水野と同じつてのが気に食わない」

「まあ、一時的な話ですよ。すぐに元に戻りますから」

私の冗談半分の不満に、『たちかぜ』は真面目な答えを返した。

「ヤンキー・オスカー・リマ、ブラボー・ジュリエット・インディ
ア。ブレイクブレイク」

「第2回、本艦終了」

通信モニターの横に立つ通信士が略号を解読し、本艦の射撃回次
の終了を伝える。

いつの間にか『たちかぜ』の事前訓練は終了していたようだ。

「撃てるのか？ 撃つのか、本当に。仲間なんだぞ？」

誰にも聞こえないように呟いた私に、あくまで冷静に『たちかぜ』
が答える。

「私達は、仲間も殺すんです。・・・覚えておいて下さい」

『たちかぜ』は前を見据え……いや、私と目を合わさないように
しただけかもしれない……言った。

「愛してくれた姉も、愛する妹も、共に戦う戦友も守るべき民間船
も……。命令ならば、必要ならば殺します」

波の音が、やけに大きく聞こえた。

「貴方に、兄弟姉妹を殺す覚悟はありますか？」

『たちかぜ』の問いに、背中に冷たいモノが走った。

兄弟姉妹を殺す？ 有り得ない。やはり人間と艦魂は違っただ
ろう。

「艦魂の存在を事前知って、艦艇を沈める事もあるなんて知ってたら、海上自衛隊なんかに入らなかつたよ」

「まあ、そうでしょうね」

それが【普通】だと、『たちかぜ』は呟いた。

結局の所、艦魂も兵隊も同じだ。自分の考えでは何も出来ず、命令に従うのみ。命令は何処か高い所から降りてきて、下っ端の考えが入り込む余地などない。

兵隊一人、艦艇一隻消えても、地球は回る。

自衛隊は存在しつづける。

射撃当日

「死ぬのは当然いやだが、俺が死んでも世界は存続するってのが悔しいな」

「・・・仕事に集中しようぜ。見ろよ、特警隊が来たぞ」

私をたしなめながらアザミンが指し示した先から、特警隊が『ゾ

ディアック』に乗って登場した。

「うわ。あいつら、人間じゃねえよ」

アザミンは特警隊の動きを見て驚嘆していた。

詳しくは言えないが、

特警隊は油船の横に乗りつけ、素早く乗り込んだ。

甲板上を警戒しつつ進み、扉を爆破して船内に突入する特警隊。

「……」

だが私は、特警隊ではなく油船の舳を見ていた。

其処に、彼女がいたからだ。

油船の艦魂の前に『たちかぜ』が転移した。

「……言い遣す事は？」

「……」

『油船』はただユツクリと首を横に振る。

「……そう」

言葉も無く、ただ存在するだけの『たちかぜ』と『油船』。

至近への着弾が、辺りの空気を震わせる。

小柄な『油船』には、なかなか当たらない。

「肉眼で見える距離なのに、当たらないわね」
『たちかぜ』は自身の砲が火を噴くのを見た。
それは至近弾となり、海面に吸い込まれた。
次は当たると確信したのか、『油船』が『たちかぜ』の方向に向いた。それを見て『たちかぜ』も正対する。

「指揮官として、責任を果たさせて貰うわ」
「・・・よろしくお願いします」

交した言葉は短かった。
幾度目かの発砲、そして・・・

「当たった！」
「おお！」

一瞬、『油船』の船上に火焰が見え、艦橋に歓声が上がった。

と、同時に私は全く別のモノを見ていた。

船首に血飛沫が飛び、『たちかぜ』が『油船』の胸に剣を突き立てるのを見た。

「慈悲の一撃か。・・・これが、俺達の義務なのか？」

目をそらしたかった。いっそ、目をえぐれば、何も見ずにすんだらう。

胃液の味が、吐気がする。

冗談ではない。

返り血で汚れた手を拭い、『たちかぜ』は『油船』の瞼を下ろした。

「貴方の献身に感謝します。貴方の命を奪った事を、忘れはしないわ」

『たちかぜ』は『油船』を抱きかかえ、そつとくちづけした。

「先に逝って、待ってて」

ゆっくり沈み行く『油船』を中心に、艦艇隊は円を描くように周りを回る。

やがて、円の中からは波が消え、周囲の海面から隔絶された一つの海となる。

気味が悪い程に静かな海面に、『油船』はゆっくり、ゆっくりと消えて行く。

『油槽船11号に敬礼する。左、気を付け』

「つけえーい！」

ラッパと汽笛の音が響き、『油船』の魂が分解され、天へ昇る。

船体は海へ、魂は天へ還り、『油船11号』の存在はこの世界から消えた。

艦隊は円を描くのを止め、単縦陳に移行しつつ離脱する。

二等海士長は右ウイングから海を眺めていた。

「身をもって責務の完遂に努め、もって国民の負託にこたえることを誓います。か」

確かに誓いにサインをした。判子も押した。

だが、それは人間の話だ。

艦魂には、関係無いじゃないか。

「と言って、俺に何が出来る」

私は何もできない。

沈んでいく船を、見ているしかない。

この時程、自衛隊に入って後悔した事はなかった。

海上自衛隊にいる限り、同じ事をまたやるのだと思うと嫌になって

「『たちかぜ』も標的艦になるんだ・・・」

それに思い至り、海上自衛隊を続ける自信はなくなった。

幕間・賢兄愚弟を地で行く(前書き)

人紹介

『三等空尉』

二等海士長の兄で、昭和57年度の生まれ。

某A大学出身で、二等海士長はこの方に頭が上がない。

幕間：賢兄愚弟を地で行く

2006年4月末頃

日本 東京、池袋

三等空尉

「よう、ボブ。帰ったか」

いきなりだが、この『三等空尉』なる人物は私の兄である。

某A大学出の将校で、私が逆立ちしても勝てない相手である。

その兄は、何故か私を『ボブ』と呼ぶのだが、理由は本人にも不明であるからして、私も知らない。

三等空尉

「（鼻をヒクつかせ）なんか、凄い『潮の香』と言っか、『磯の香り』がするな」

二等海士長

「あ、やっぱり？」

一応、『たちかぜ』は毎日入浴出来る艦艇だったが、浴槽は海水風呂で、勤務もあるからかなりいい加減な入浴になってしまっていた。その為に、私の体は『磯臭い』という表現がピッタリになっていた。

二等

(こづいつ場合の為に、香水って有るんだろうか)

・・・市販の安い香水に、磯臭いのを混ぜた匂いを想像してみた。

二等

「・・・地球と鼻に優しくないな」

止めておこう。ちょっとした化学兵器になりそうだ。

二等海士長

「ふーん。じゃあ、航空でもモニタしてたんだ」

三等空尉

「ああ。正直、邪魔だったね」

艦隊集合の訓練を航空自衛隊はモニターしていたらしい。

三等空尉

「特警隊はスゲーって皆言ってたな。訓練自体は邪魔だったけど」

油船を沈めた『M海面』は、航空自衛隊にとっても気になる空域の近くであり、スクランブル等で真上を通過したりもするらしい。

三等空尉

「海との連絡が取り難いのなんのって。人間で本土防空戦の指揮をするのに、海自の情報も貰わなきゃ動けないっての」

二等海士長

「俺に言われてもなあ」

下っ端に言われてもどうにもならん。

二等空尉

「んで、訓練で得る物はあったか？」

二等海士長

「まあ、あったよ」

確かに、得る物はあったが、何かを失った気がした。

二等

「何か無くしたような……。いやさ、これから『亡くす』んだけどね」

『たちかぜ』の除籍は決まっていた事で、避けようが無い。別に、それは構わない。

問題は、私がCDS員だという事だ。

CDS・・・コンバット・ディレクション・システム

その役割は結構な広範囲であり、電子整備と射撃管制を兼ねる艦も有る。

そのまま下手をすると、私は対艦ミサイルをぶっ放す係りに成りかねないのだ。

運悪くCDS員で進み、更に乗艦が『たちかぜ』への射撃に加わったりしたらどうなるか？

大変残念な事態を招くであろう事は間違いない。

幸か不幸か、私は知り合いに砲弾を叩きついたり、ミサイルぶっ刺したり出来ない人間である。

しかし、命令とあらばヤラネバならぬ。

やりたくなければ……………

三等空尉

「なにやら、悩んでいるな」

二等海士長

「相談はしないぞ」

(俺も男だ。悩みくらい一人で解決せねば)

三等空尉

「ふ。男の『子』だもんな」

子供扱いされた。

何とは無しに、見透かされている気もするし。

二等海士長

(敵わんなあ)

別に勝負しようとかって考えていたわけではないが。

幕間：賢兄愚弟を地で行く（後書き）

二等

「ジャギ様は正しいって思うね。」

「たちかぜ」

「ジャギ様？」

ジャギ様がわからない人は『北斗の拳』を見てね。

第7話・終わりゆく艦（前書き）

私は常に日本は正しいと信じる。何故なら、それが私にとって最も都合が良いからだ。

第7話：終わりゆく艦

艦魂・・・我々が、我々の都合で建造する艦艇に宿った魂。

私達は彼女達を自分の都合で生み出し、弄び、殺し合わせ沈めさせ、艦齡が上がれば棄ててしまうのだ。何と一方的な関係だろう。

『たちかぜ』は何時も明るい表情で、泣き言も（少なくとも私の前では）言わなかった。それは私への信頼があまり無い事を意味していたのかも知れないが。

そんな『たちかぜ』の涙を、私は一度だけ見た時があった。

『たちかぜ』が護衛艦としては最後の行動となる挨拶回りに出発する時の事だ。

『たちかぜ』は艦橋トップでただ一人、遠ざかる母港を眺めて涙を流していた。声も無く、表情も無い。ただ涙を流すだけ。

「人を恨んでいるか？」

私はそう訊いた。

我々（にんげん）の勝手な都合で生み出され、体をいじられ、最期は散々打ち据えられるのだ。恨んでも恨みきれまい。そう考えたのだ。

しかし、『たちかぜ』は首を横に振った。

「同情なんか要りません。私達だって人間と同じように闘っている

のですから」

そう言つて、『たちかぜ』はマストを仰ぎ見た。
そこには風になびく自衛艦旗が掲げられていた。

そうだ、彼女は誇り高き戦闘艦だ。同情等必要ない。

かつての大戦で軍人としての誇りを胸に、日本の未来を遣そうと散つた幾多の艦艇の末が彼女達だ。

祖国を愛し、人を愛し、人と共に生き、国に殉ずる。それが国家の盾たる艦魂だ。同情等は侮辱にしかならない。

「恨みなどしませんよ。私達は『国』と『人』の為に生まれてきたのですから」

『たちかぜ』は、あえて『日本国』と『国民』とは言わなかった。それは呪いのようでもあった。

日本に限らず、あらゆる国の艦艇には魂が宿る。

その魂、艦魂は艦艇が沈めば死ぬ。あの標的艦（油船）の様に。そして、当然だが艦艇が沈めば人死にも有り得る。それも沢山だ。

敵同士であつたとしても、所属が違つただけで同じ人である。彼の死と我の死と、一体何が違うのか？

流す血は誰でも赤い。魂は平等である。

それでは、敵としてやつて来る彼を殺し、未来を奪う理由は何だ？
彼を弑し、彼の周りの人間を悲しませる事に、正当な理由があるか？

理由ならば在る。

私は日本人で自衛隊員だ。我が国の平和と独立を守る為に、殺したり殺されたりするのが義務だ。

しかし、である

果たして、我が祖国はそこまでして守るべき国であろうか？

彼我の艦も乗員も、国を愛している。しかし、国は愛されるだけの価値があるだろうか、我が国の国民はどうだろうか。

「俺は・・・何を考えているんだ」

艦魂との関わりが、私に艦艇を『モノ』としてでは無く、艦魂として捉えるようにさせた。

そしてそれは、艦艇に乗る人間を意識させる様になった。

この時、私は『たちかぜ』を……いや、艦魂を妬み、憎んだ。

艦魂は存在目的がハッキリしていて迷わない。何故ならば造られた存在だからだ。

自身の存在理由が明らかなのは、非常に羨ましい。

そして、艦魂などというモノが存在しなければ、私はもっと気楽だったろうという思いが、艦魂を憎ませた。

第7話：終わりゆく艦（後書き）

つい最近、『たちかぜ』の本当の最後の出港の画像を見ました。最早関わりの無い事だと思っていたのですが、まさか涙が出るとは思いませんでした。

もし、本当に艦艇に魂が宿るなら、安らかな眠りのあらんことを。そして、私と艦艇の魂が、決して見えぬ事まみを願います。

『たちかぜ』

「最近北朝鮮が叩かれていますね」

二等

「なんか『第2次大戦は全部ドイツの責任』『太平洋戦争の責任は全て日本にある』ってという意見と同類っぽくて好きになれんな」

朝鮮半島の現状は、半島を分断した米ソと、これまで状況を看過し続けた（日本を含めた）周辺国にも責任がある。

二等

「責任があるから、現状を打破する義務がある。」

つまりは実力を以ってしてでも……

二等

「ま、責任も権力も無い人間の戯言と聞き流し読み飛ばしして下さい。」

第8話：崩れる精神（こころ）（前書き）

艦は『浮かべる城』である。

人も『人は城、人は石垣』と言われる。

この2つの言葉は全く関係はないのだが、人の精神と艦魂の精神が密接に関係している事を考慮して読むと、人も艦艇を構成する一部だという言葉にも思える。

第8話：崩れる精神（二）

艦が終わりゆくならば、組織は崩れていく。

前回から少し話は遡る。

横須賀、京急横須賀中央駅前、Yデツキ

私は見慣れた顔を見つけて近寄った。そこに居たのは同期のS原士長。

「S原士長、こんな所でどうした？」

「二等か。いやなに、片OKが金を貸して欲しいらしくてな」

片OKとは同期の士長であり、舞鶴から一緒に来たヤツだ。確か、配置は魚雷員。

「金を貸す？ 金銭の貸し借りは禁止だぞ」

自衛隊内ではあまりに金銭トラブルが多発したため、金銭の貸し借りは禁止されていた。

私の忠告に、S原士長は”ニヤリ”とした。

「分かっているさ。だから、これは『施し』だ」

S原士長は寒気のする様な笑みを浮かべる。

「哀れな貧民に、俺が情けの雫を垂らしてやるのさ。ククク・・・」
サティスト全開なS原士長であった。

「そういえば二等、工原のことは聞いたか？」

「工原？ 何かあったっけ」

工原は同時期入隊の練習員で、かなりの間抜けである。

ドック中の事だが、私が後ろに続いているにも関わらずハッチを閉め、しかも自分で閉めたハッチに指を挟んだ強者だ。あんぼんたん

で、その工原だが……

「様子を見る為に1ヶ月休暇だとさ」

「ほう。自殺未遂をとって1ヶ月の有休か」はんせいのボース

先日、『たちかぜ』に先立って『しらゆき』が出港したのだが、水測員である工原は内火艇で【バウメン】として警戒にしていた。【バウメン】とは内火艇の艇首バウに立つ見張り・雑用員で、1分隊の海士が就く。

時間帯は艦旗掲揚の頃で、『たちかぜ』でも〇八〇〇と同時に艦旗が掲揚され、手空きの者は艦旗に敬礼していた。

そして、工原も敬礼してしまったのだ。

バウメンは不安定な艇首に立つので、敬礼はせずとも良い……というより、安全面からしてはいけない。

しかも、『たちかぜ』は護衛艦隊旗艦である。間違った動作をして舐められることは赦されない。

もしくは、旗艦のバウメンが敬礼しているのを見て、他艦のバウメンがそれに倣ったらどうする？ 工原の行動は、他艦の乗員を危険に晒した可能性もあるのだ。

当然、先輩方は工原に対してブチ切れた。

その頃、私は舷梯……左舷後部にある、折り畳み式の階段。内火艇等を繋ぐ……を展開する作業に加わっていたが、I原が居ない事に気付かなかった。

S原士長は、舷門当番に就いていたのだが、内火艇との交信中に『『しらゆき』試運転終了、帰投せよ』と、言った事を怒られていたらしい。

なんでも、『帰投せよ』という指示だけ言えばよく、艦名・状態を言うのは防諜面からよろしく無いとの事だ。

さて、I原の事だが、ヤツは2〜3時間程姿を隠した。私が2C ICでダラけていると、水測の海曹が探して訪ねてきたりした。

I原は何処に消えたのか？

じつはI原は後部便所でサイドパイプの紐を使い自分で自分の首を絞めていたのだ。

『自分が嫌になった』とか言っていたらしいが……

「ポーズだよな」

「ああ」

サイドパイプの紐は、サイドパイプ号笛を首から提げる為の紐である。何処かに引っ掛かったりした場合、首を絞めたりしないように結構切れやすい索なのだ。

首をくくろうとしても体重で切れる代物だし、しかもソレを手で絞めていたというのだから、死ぬ為というよりはパフォーマンズであると考えても無理はない。

「そんなもんで死ねたら苦勞しないぜ」

「彼奴は死に方も分らない」

厄介事を起こすとこんな具合に陰でグチグチ言われるのである。死んじやったりしたら、何を言われるか分かったものではない。

さて、刻は『たちかぜ』最後の行動時に進む。

久々の出港の為に船酔いを起こした私は、艦中央部にある食堂から前部便所^{ハライソ}へと向かってフラフラと歩いていた。すると、反対方向からお多福みたいな顔をした2分隊の海士が歩いて来た。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です」

私は殆んど反射で挨拶をしたが、相手が誰だか分からなかった。

（誰だコイツ？）

私は相手の正体が気になったので、全乗員の名前と顔写真が貼られている人員配置図を見る為に……便所へと急いだ（人員配置図は食堂から前部便所へ行く途中にあった）。

「いよう！ 二等、船酔いか！ 某大生みたいに作業服をゲロまみれにするなよ」

「あんな自衛官でも船乗りでもない防舷物^{ジャマモノ}と一緒にするな」
途中でS原士長と遭遇した。

「まあ、某大生は出港後30分で吐いていたからな。クハッハハハ」

いつぞや、某A大学の学生を横須賀から呉まで運んだのだが、出港30分後に作業服ゲロまみれにしていたり、食堂で喫食中に帽子を被っていたりした者がいたのだ。

三等空尉から聞いた『某大生とか言っても所詮は学生』という言葉葉の通りであった。

「なんだ、S原士長はゲロが好きなんか」

「んなこたあない。吐きそうで苦しんでいる姿が笑えるんだ」
名は性格を現すって本当だね。

「吐いた後も良いな。スッキリした解放感と羞恥心に染まる表情がイイ。しかも某大生の将来は幹部だからな。未来の部下の前で醜態晒したという・・・」

「おっと、もうこんな時間だ。僕もう帰らなきゃ」

「海に還るのかい？」

「純粋というか、欲望に忠実なサディスト程手に負えないモノはない。」

カラカラと笑うS原士長から離れようとした私だが、ふと思いついた。

「さつき、お多福みたいなお顔の2分隊員と行きあったけど・・・」

「ああ、リンダだな」

「『リンダ』？」

リンダというのは2分隊の士長で、補士の同期なのだが……。

「あいつ、あんな顔じゃなかったよな。お多福風邪か何かかな？」

「違う違う。上役に殴られたのさ」

「殴られた？」

話はこうだ。

リンダ士長は未成年なのに喫煙しており、ソレを先輩の士長達が注意していた。

リンダ士長は表面的には喫煙をやめていたが、コツソリと喫煙しており、それに先輩海士も気付いた。

そして昨日、遂に喫煙している現場をおさえられたリンダ士長だが、喫煙はしていないと言い張った。

「で、カルシウム不足な先輩方は、リンダを顔の形が変わる程殴りましたとき。めでたしめでたし」

「めでたくねえ」

なんともまあ、馬鹿な話しである。

以前ならば、自力で稼いだ金を使って買った煙草を吸うことは、注意を受けても殴られはしなかった。嘘をついた事に対する制裁にしても、あそこまで殴る事は無い。

私は急に暗い話題が増えたような気がした。

暫くトイレの住人となった後、リフレッシュした私は『たちかぜ』を探して歩いていた。

1甲板を探し回ってみたが、『たちかぜ』は見付からない。

「しゃーない、上から見て行くか」

私は艦の一番高い場所……艦橋トップへ行く事にした。艦橋内部を抜けると色々アレなので、一旦外に出て艦橋後ろのラッタルを昇る事にした。

「おや」

後部構造物から上甲板に出た私は、旗甲板で佇んでいる『たちかぜ』に気付いた。

「無防備だなあ、オイ」

結構強い風が吹いており、ズボン履きの作業服だから良いものの、スカートだったら下着が見えていただろう。

「いや、30越えの大年増の下着見ても嬉しくねエス」

本気で願いさげた。

等と言っていると、『たちかぜ』の姿が見えなくなった。

いや違う。『たちかぜ』はその場にしゃがみ込んでしまっていた。

「！」

私は何か起きたのかと思いラツタルを駆け上がり……

【ズルツ！】

「ファオツ！？」

【ゴン！】

足を滑らせて3段程落下した。

「ぬお〜、脛打った、ビビった、死ぬかと思った、落ちた、心臓バクバク」

気を落ち着かせる為に、口を動かす。

「3段程落ちただけだ、大した事は無い。俺良し、フネ良し。異常無し」

何とも無いのだと自分に言い聞かせ、今度はゆっくりとラツタルを昇った。

果たして『たちかぜ』はへたり込んでいた。見た所怪我はして無かったが……

「まあ、艦が何事も無く走っているから、怪我とかじゃないだろうとは思ったけど」

「二等……ウプツ、オゲエ」

『たちかぜ』はエチケツト袋片手に盛大に嘔吐していた。

ちなみに、海自ではゲロ袋は普通のコンビニのビニール袋で良いが、外側に紙袋を被せるように言われた。こうすれば、中身が見えないので周りを不快にしなくて済むワケだ。

で、『たちかぜ』もソレを実践していたが、吐いてる姿だけでも少し気分が悪くなるし、苦しんでいる姿を見て楽しむ性癖も無い私は目をそらした。

「何か……用ですか？」

「あー、ん。最近は調子どうかな、と思って」

互いに顔を合わせない私達。非常に気不味い。

「調子は良くないですね」

「……だろうね」

予想はしていた。艦魂の精神と乗員の士気には密接な関係があると言われている。乗員の間には鬱屈とした空気が漂っている今の状況では、『たちかぜ』が苦しむのは道理だ。

「用件はそれだけですか？ でしたら、配置に戻って下さい」
「ラジャ」

私はゆっくりと慎重にラッタルを降りた。

私は『たちかぜ』の助けとなりたかったが、状況の打開には乗員の士気を高揚させるか『たちかぜ』の精神を昂ぶらせるかする必要があった。

下っ端である私には乗員の士気をコントロールする術は無く、『たちかぜ』を元氣付けるには人生経験が少な過ぎた。

私に出来る事は何もなかったのだ。

そして……

事件はまだ起きるのだ。

佐世保

四ヶ町商店街の酒屋にて、1升で1万円する『極上』という酒を買っべきか迷っている私にパタ士長が話かけた。

「二等、酒は買っても良いけど艦には持って帰るなよ」

「それは当然だ。でも、なんで今日に限ってそんな事を？」

『極上』は諦めて別の酒を実家に送る手続きをしながら、私は疑問を口にした。

「ああ。実は昨日、御自由石がな……」

御自由石とは仮名であるが、同時期入隊の練習員であり、パタ士長と同じLCHR配置の一等海士であった。

話はどうだ。

2L（第2居住区・1甲板後部にあった）では酔っ払った海曹が御自由石に絡み、日頃の態度を注意していた。他人の革手を勝手に使ったり、上司や先輩にタメ口きいたりを、である。

御自由石は注意を受けているにも関わらず、その時も態度が悪かったらしい。

そして例の如く暴力事案発生、である。

その日の夜、後部便所の一番奥にある個室がずっと使用中になっていた。

個室の中では『たちかぜ』がえずいており、艦の魂である彼女のうめきは離れた位置にある4L（第4居住区）で就寝していた私にも聞こえた。

私は『たちかぜ』が苦しんでいる事を知りながら・・・何も出来ず。

戦闘単位としての護衛艦『たちかぜ』が崩れてゆくのも、ただ黙って見ているしかなかった。

第8話：崩れる精神（二二二）（後書き）

二等

「やらないつもりだったが、次回は10部分の記念話をやる」

『たちかぜ』

「部分で記念だなんて、半端ですね」

二等

「【朝雲】を読んでて思った事があったね。」

防衛産業から中小企業の撤退が相次ぎ、戦闘車両は35社で技術消
失したそうだ。

二等

「ホラ、ヤバそうな話題だろ？」

幕間：不景気・貧乏（前書き）

最近の【朝雲】を読んで目に着いた記事についてツラツラと書いてみた。

不景気の国防への影響については初めて知った。ミサイル防衛や海賊対処も結構だが、メディアと自衛隊の広報はこうした情報も伝えて欲しいと思った。

幕間：不景気・貧乏

一等空士

「ヤッホー、元気かね？ 今日ほ嘘雲・・・もとい【朝雲】と50kgもあるクセに『携帯式』な地对空誘導弾を持ってきたよー。」

二等海士長（以下、二等）

「オブリガード！ メルシイ」

『フレンドリー（以下、ドリー）』

「何で葡語と仏語なんでしょう」

『たちかぜ』

「さあ？」

さて、今回は頼みもしないのに【朝雲】を持って来てくれるお節介さん、一等空士（以下、一士）が来てくれた。

二等

「へい、ジョーイ！ 50kgって何の冗談だい？ 91式携SAMは15kgだろ？ fiftyとfifteenを聴き間違えたのかい？」

一士

「ハハハ！ マイク、それは違うさ。91式携SAMは本体が15kgでコンテナに収納すると合計50kgになるのさー！」

二等

「オーイエ！ 僕は【要救助者 14】人って聞いたから20人乗りのレスキュー・ヘリで行ったら、要救助者は 40 人居ました】ってという話を思い出しちゃったよ！」

『たちかぜ』

「無駄知識ですね」

『ドリー』

「そのへりの飛魂には同情するわ。」

でも、ちゃんと救助出来たというのがすごい。

二等

「んで、この緑色の棺桶はどうすんの？」

一士

「話のネタにするのさ。湿度表示よし、解圧解放！ ステーよし、サーモラベルよし！ ゴムパッキン・・・よし！」

一士は地面に突き刺さった棒……アース……に触れてからテキパキと点検を行う。

二等

「・・・へえ。」

『ドリー』

「ウフフ、空自も良いな、と思っただけじゃっつ。」

二等

「ああ。少し認識が変わった」

『たちかぜ』

「むっ！」

『たちかぜ』が睨んだが、二等は気付かないフリをする。話をしている間に一士は点検を終えていた。

一士

「よし、デケタ！ アースタッチしたら触って良いよ！」

二等

「わーい！ 新しいオモチャだ！」

『ドリー』

「オモチャじゃないですってば！」

はしゃぐ二等は携SAMをベタベタ触る。

二等

「ミサイルの先端はシーカ・ヘッドか。弾頭は何処だ？」

一士

「ミサイルの真ん中辺りさ。300G（嘘）の衝撃で発火する着発オンリー。命中しない時は発射後23秒（嘘）で自爆する」

『ドリー』

「最大速度がマッハ1.9（嘘）ですから、14kmは飛びますね」

『たちかぜ』

「・・・じゃあ、なんで有効射程5km（嘘）なんですか？」

一士

「色々あるんです」

二等

「昼間は可視画像優先で、夜間はIRロック・オン優先か。」

『たちかぜ』

「夜間戦闘用にイギリス製暗視装置までつくんですか」

『ドリー』

「それじゃあ、お値段は高いんでしょうねえ」

一士

「それがなんと！ 三千万円！！ 三千万円での御奉仕です！」

・
・
・

【全員】

「「高っ！」「」

10部分記念

自衛隊VS不景気

二等

「さて、防衛関係費の中で、現有装備品のアップグレード等の維持整備費用の契約額は増大し、平成17年度からは新規調達額よりも多くなっている」

装備品の高性能化により、価格は上昇しており、『あたご』は『こんごう』の1・2倍のお値段だそう。

そりゃあ、容易に新型艦艇を買ったりは出来んわな。

『ドリー』

「調達の減少は自衛隊にも生産企業にも痛いですね」

『たちかぜ』

「あ、『さざなみ』の記事が載ってる。『護衛船舶のべ82隻に』」

二等

「はい、それは置いとこうねー」

朝雲の6月11日号によると、

『少量受注生産で初期投資が大きく、特殊、高度な技術が必要など、個々の装備品を開発・生産出来る企業はわずかに数社というのが現状だ。』

『また、技術者の養成も年数がかかり、一つの企業の撤退が、わが国の防衛生産・技術基盤の喪失に直結する問題をはらんでいる。』

一士

「で、一つの企業の撤退が大きな問題になりかねないんだけどさ・・・」

魂消る事つけあいな数字が書かれている。

『防衛省の聞き取り調査では、戦闘機関連企業の場合、15年度以降、レドームや燃料タンク、スチール鋳物部品、レドーム用樹脂を生産する企業、精密鑄造会社など計20社で事業から撤退中か、撤退を決めている』

二等

「20社!！」

『ドリー』

「昭和61年までは年間平均18.5機あつた調達量が平成20年度ではゼロ(!)という数字が背景・・・」

『戦車・戦闘車両関連企業でも事情は同じ。アルミ鋳物部品、パイプ類、電装品全般、継ぎ手の生産などの企業が事業から撤退、油圧部品、ギヤ・シャフト類、機械部品などの生産会社が生産辞退、板金部品やワイヤーロープの生産会社などが自主廃業か自己破産したほか、13社が倒産』

『計35社の技術が喪失しつつある』

二等

「コイツあやべー。ヤバすぎる」

『ドリー』

「我が国の防衛は、石垣を崩されたり堀を埋められたりではなく、台所から崩壊するのですね・・・」

現代戦は制空権を奪えなければ不利である。戦闘機の技術基盤が

崩壊すれば、他国に命綱を握られる事になる。

戦車や車両は最後の抵抗線である陸上戦力の要だ。その生産を他国に依存するなど、考えられない。

一士

「朝雲の6月25日号には、

「戦闘機の生産技術基盤のあり方に関する懇談会」の第1回会合がおこなわれた、と書いてあるがね。」

二等

「まったく、『レギュラス』みたいな無人機をデカデカと載せてるが、もつと考えて欲しいぜ」

朝雲の第一面には、海賊対処法の記事と、『技本開発の無人機間もなく飛行試験』という記事が掲載され、その横に『下請け、崩壊の危機』という記事があった……。

おまけ

【貧乏が悪いんや！】

『ドリー』

「無人機ですか」

『たちかぜ』

「昔の対艦ミサイル『レギュラス2』に似てますね」

一士

「F-15から空中投下される無人偵察機だ。すげえだろ？ 硫黄島で試験するんだぜ」

二等

「そんな金があったら少し海自に・・・あ、米軍のM80『ステイレット』の記事が載ってる。チクシヨウ、アメさんは景気良いな」

一士

「ケケケ。海自は『あしずり』に航空隊を乗せられないくらい貧乏だもんな」

『たちかぜ』

「『あしずり』ではなくて『あたご』です」

一士

「ハア？ フネなんてみんな一緒だろ」

二等

「まあ、俺も最初は『ゆき』クラスと『きり』クラスの見分けもつかなかったがよ・・・」

興味ない人間からすればそんなモノだ。

『ドリー』

「そんなに貧乏なのに、空母が欲しいんですか？」

一士

「馬鹿だな。ジェット戦闘機1機100億円、パイロット一人育て

るのに2億円かかるんだぜ」

しかも、最近は、リスクが高く、体力・知力・精神力が必要なパイロットパイロットは人気が落ち込んでいるらしく、空自でもパイロットは不足気味だ。

一士

「空と海でパイロットの奪い合いになるぞ」

『たちかぜ』

「しかも、我が社にはジェット戦闘機の運用経験もありません」

二等

「別に俺は空母欲しくねえし」

しかも、艦艇というものは寂しがりやである。いくら強い艦艇であつても、一隻だけでは存在できない。

と、いつものも、天下無双の艦が居たとして、その艦がドック入りしたりしたら前線の戦力はガタ落ちになる。日本の場合、空母はシーレーン防衛に使つだろつから、前線に穴を開けるのは非常にまずい。

それを防ぐためには同程度の能力の艦艇を建造しておく必要がある。これが姉妹艦だ。

また、空母ならば艦上機の乗員育成等のためにも訓練艦が必要である。

二等

「つー理由で、空母を建造するなら最低2隻、出来れば3隻、欲を

言えば4隻欲しい」

『たちかぜ』

「えーっと、搭載機数が20機の軽空母か100機の大型空母を造るとして・・・」

【軽空母の場合】

本体≒800億〜1500億円

搭載機20機≒2000億円、

パイロット20人≒40億円+給料・手当で毎月40万円

【大型空母の場合】

本体≒1000億〜2000億円

搭載機100機≒1兆円

パイロット100人≒200億円

二等

「んで、更に×2〜4で、整備員の養成費用・給料、他の乗員の給料、艦の維持費を足すわけだ」

乗員の給料が毎月平均20万円だとして、300人なら6000万円。年2回のボーナスもあるから毎年8〜9億円。

『ドリー』

「搭載機の確保がまずムリですよ。調達の話でも出ましたけど、ジ

エイト戦闘機の調達量は昭和でも年間18・5機ですよ?」

二等

「俺としては2000mも3000mもある艦で出入港はやりたくないな」

『たちかぜ』

「・・・港の問題もあるでしょ」

『ひゅうが』でさえ入港できる港は限られているのだ。3000m級の大型空母などは、もっと制限されるだろう。港の整備にも金がかかる。

一士

「・・・海自が空母持つより、『ドラもん』の生まれる方が早いんじゃない?」

二等

「・・・それまで国があるかな?」

幕間：不景気・貧乏（後書き）

二等

「護衛艦へのRAM装備も無理っばいなあ」

一士

「海自も携SAM使えば？」

二等

「無茶言っな」

一士

「まあ、お前もあんまりフラフラするなよ。お前の兄、3等空尉が心配してたぞ」

二等

「わかったってば。兄貴に宜しくな」

一士

「おっ」

一等空士は帰って行った。

第9話：気でも違ったか？（前書き）

日本国と日本国民の間には、太平洋より広く、マリアナ海溝よりも深い溝が存在している。

だから、日本国は国民を守る器足り得ず、日本国民は国を守る意識も希薄である。

第9話：気でも違ったか？

携帯の画像を見ると、佐世保から舞鶴へと向かい、2006年9月15日には舞鶴で上陸しており、教育隊の遠景を撮影している。また、同19日には小浜沖に錨泊、初の真水管制を受けている。

そして、2006年9月24日、『たちかぜ』は大湊に錨泊した。

水音、ペンキを剥がしながら繰り出される錨鎖、海中にモウモウと塵が舞う。

人も海中を漂う塵と同じだ。自らの意思と関係無しに舞い上げられ、流され、沈殿する。そんな考えが頭をよぎる。

はてさて、私は今、海中を行き場無く漂っているのか、それとも海底に沈んで上に降り積もってくる塵に押し潰されているのか……。

「二等海士長は上陸ですか？」

「んー？ 上陸致しますよ」

思考の海に沈んでいた私は、『たちかぜ』に声をかけられて浮上する。

この時既に『たちかぜ』は色が抜けてしまってきていた。

”幽^{かす}かなるもの”という表現が哀しい程に似つかわしい姿となっ

た『たちかぜ』は、艦としての能力も落ちていた。

舞鶴沖での事、

10隻程の護衛艦が経空目標対処訓練を行った。

飛来するP-3Cを5インチ砲で追隨するのだが、『たちかぜ』は3回連続で目標を補捉^{トラック}出来ず、訓練は失敗に終わった。

もはや、誰の目にも『たちかぜ』の力が衰えている事は明らかであった。

「来ましたね」

「・・・何が？」

また考え込んでいた私が『たちかぜ』の指差す方を見ると、1隻の艇が近付いてきていた。

「トイレットペーパーの補充です」

この行動中、何故かトイレットペーパーが大量消費され、大湊の前にペーパーが尽きるというアクシデントに『たちかぜ』は見舞われていた。

「まったく、何でトイレットペーパーが無くなるんですかねえ？

一体何に使っているんでしょうか？」

「さてな。それは男の秘密というモノです」

艦魂相手では乗員は秘密もクソも無いが、まあ、言わぬが華たる

う。

こうしたやり取りも終わりが近いのだと思うと、ひどく悲しい。

会話が途切れる。

沈黙は嫌いだ。沈黙は思考を深くさせる。

何か言わないと、先の事を考えて落ち込んでしまいそうだ。

自分が今日を生きるだけで精一杯な私には、艦の行く末など考える余裕は無いのに。

『上陸員上陸用意』

「じゃあ、上陸してくる」

「行ってらっしゃい。ちゃんと戻って来て下さいよ」

私は私服に着替え、舷梯から内火艇に乗り込む。繋船桁での乗り込みは苦手なので有難い。

(南部煎餅と、水飴。それから酒だな)

私は、当直員・『たちかぜ』への差し入れと、実家への土産をどっしりかと思いつきながら内火艇に乗り込んだ。

天気は穏やかで、温い。

内火艇は自衛隊の棧橋ではなく、普通の漁港へと着いた。港からそう遠くない山の頂上にレーダーサイトがあり、港を見下ろしている。

レーダーサイトに『お疲れ様です』と言いながら、私は大湊での最初の一步を踏み出した。

私は海岸線を歩きながら考えた。

大湊を出港すれば、後は横須賀に帰り、除籍の準備に入るだけである。除籍までに私は、心の整理をつけなければならない。

「大切な人が死んだら、・・・どうすれば良いんだったかな？」

別に死ぬつもりは無いし、『たちかぜ』が死んだとしても、それが事故等ならば悩みはしない。

問題は、私の所属する自衛隊が『たちかぜ』を処分するのだということだ。

私は艦を愛していたと思う。官品愛護とか男女の恋愛感情ではなく、家族愛に近い思いがあった。

職場であり生活の場でもある護衛艦『たちかぜ』。よく分からない存在で、仕事の大先輩である『たちかぜ』。……たまに一緒に才二ギリを食べたり、仕事の指導をしてくれた相手を、我々自衛官は殺すわけだ。理由は新兵器の実験やら練度維持のため。

国を守るために建造された鋼鉄の塊を、国の為に破壊して沈める事の何が悪い？

悪くはない。ただ、私は”ソレ”がただの鋼鉄の塊ではない事を知ってしまった。傍から見れば狂人の妄言に過ぎないだろう。『艦艇には魂が宿り、心を持ち、痛みも感じれば血も流す』などと誰か信じるだろうか。

一年以上も一緒にいた相手を、家族同然の存在を破壊・殺害しなければならぬのが海上自衛隊だ。

「海上自衛隊など、滅びてしまえば良い」
(ついでに、日本も滅びれば良い)

本気でそう思った。私は家族や艦を愛する程には自衛隊を愛してはいなかったし、日本国に対してはアメリカの一部にでもなれば良いとさえ考えていた。

「・・・まあ、俺が楽に生きたいからだけだよ」

私は『たちかぜ』の助けになりたいと考えてはいたが、それは『私』が『たちかぜ』を失いたくなかったからであり、そこには国防の意識はない。

また、『たちかぜ』を失わないために何かをすることも、人生を棒に振りたくはないがためにしなかった。

「私は、我が国の平和と独立を守るには、脆弱で利己的に過ぎる事を告白いたします。つてか」

結局のところ、私は自分の身が一番大切であり、自分の人生を守る為に国家の命にしたがい、『たちかぜ』を沈めることに目を瞑る。そして、私を感じる罪悪感を全て『自衛隊』という組織のせいにするわけだ。

なんとも卑怯だ。

自分は一介の兵士に過ぎず、何の力も無い。だから『たちかぜ』をどうにかする事はできなかった。でも罪悪感に苦しんだ……と、アピールするわけだ。

「問題を問題として捉えるからいけないんだよな」

私はダラダラと海岸を歩いた。

死ねば悩む必要はないと思った。死にたくないと思った。

「辞めるか……」

少なくとも、自衛隊にいなければここまで悩む必要も無いだろう。そもそも、国防とか自衛隊とかはどうでもよく、やる気など微塵も無かった私だ。悩んでまで海上自衛隊に居たくはない。

いつそ、全ての人類が、いや、地球が一瞬で破滅すれば、誰も苦しまないし悲しまない、悩みもしない。素敵な解決策だと思う。

「死ねばいいのに　死ねばいいのに」

命が平等だと言うなら、紛争や飢餓で死んでいく人間や、人間に食われる牛や豚に付き合っつて、皆で死ねば良い。

私は地球の滅亡を妄想しながら、むつ市の海岸を3時間ほど歩き続けたのだった。

第9話：気でも違ったか？（後書き）

さて、遂に作中の二等海士長も狂い始めたが……

二等

「俺が核ミサイルの発射スイッチでも握っていたら、発射してたかもね」

だが、そんな力は二等には無い。

二等

「ま、今はダラダラと生きていたいから、『全人類滅亡汁！』なんて言わないけどね」

さて、艦魂が居るとか言う時点でイカしてる二等海士長は、横須賀に帰投してどんなイカレっぷりを発揮するのか。

二等

「ところで、『イカれた』と『イカした』とを、よく間違えるのは俺だけか？」

お前だけだよ。

二等

「うは。やっぱり害悪だな、自衛隊は」

第10話：陸揚げ作業と馬鹿（前書き）

今回は弾薬等の陸揚げです。

これにより『たちかぜ』は戦力としては数えられなくなります。

第10話：陸揚げ作業と馬鹿

横須賀、船越地区。

普段ならばF-10に係留されていた『たちかぜ』は、他の入港艦艇の邪魔にならないようにF-9へと係留されていた。

F-9には通常、『ちよだ』が入港していたが、今はいない。

『たちかぜ』は除籍準備の為に弾薬を陸揚げしたり、レーダーを降ろす。その作業中は甲板の通行に制限がかかるので、いつも通り外側に停泊艦がいる場合は、その艦の乗員が出入り出来なくなる事も考えられる。

だから『たちかぜ』は、他の艦の邪魔にならないように隅に引っ込んで除籍準備をする。

『たちかぜ』 食堂

自販機も撤去されてしまい、椅子と煙草盆くらいしか魅力がなくなった食堂に、下っ端ばかりが集まっていた。

「いや、参ったよ。顔が腫れたまま戻らないかと思った。」

「んなわけ無いじゃないか」

先輩にしこたま殴られて顔が変わってしまった”リンダ”も、顔の腫れはすっかり引いて普通の顔をしていた。

「ま、あのままならパプリカの後釜でも狙えたんじゃないか？」

「海自のマスケットキャラか」

「やめてくれよ、あんな下膨れじゃ女の子にモテないよ」
リンドはS原士長と私の言葉に、本気で困った顔をした。

「まあ待て諸君。男は顔じゃない」

ポツカのホットレモンなんぞを飲んでいたパタ士長が自分の胸を
”ドン”と叩く。

「男にとって大事なのは、ココだよ、ココ」

胸を叩きながらそう言ったパタ士長に私は

「胸の大きさ？」と、訊いてみた。

『ブフツ！』

食堂の隅にいる”員数外1”がコーヒーを吹き出した。

(つつーか、そのコーヒー、俺が買ってきたヤツ)

「おいおい、二等。男が胸の大きさを大事にしてどうするよ」

「え？ どうするって、やだなあパタ士長。それを真っ昼間から言
わせますか」

「わー、パタ士長やらしー」

「やらしー」

私達のおふざけスイッチが入った。

「ちょっと待て！　なんでオレがやらしーって話になるんだ!？」

「そりゃ、あれだ」

「顔」

「歳」

既に27歳でオジン顔のパタ士長はいたく傷ついた。

「ぐおお、見た目は関係無いつて話をしてたのに……」

「アツハツハ」

「やっちまつたな！」

作業中の休憩は大抵、こんな具合に笑いあえていた。だがそれはその時だけで、仕事となればおふざけスイッチはOFFになり、仕事モードが起動する。

ちなみに、将来を悲観するモードまで搭載されてある。

「・・・そう言えば、山本土長は辞めるってな」

「マジか？ C I W Sの楠木士長もだぜ」

「加T O W士長も辞めるって言ってたしなあ。『今が辞め時だ』と
かって」

一瞬にしてドンヨリした空気に包まれる。

「I原は陸警隊送りになったしな。あの野郎、丸一月も艦に居なかったのに乗り組み手当て貰ってたんだぜ」

「マジか？ 一編殺そうぜ」

「休暇で陸に居たのによお。それだったら俺達は100万くらい貰わないと割に合わねえー！」

皆、ギヤーギヤー言い始める。

「まつたく、I原め。・・・そう言えば、御自由石は？」

無能1号（I原）とセット扱いなクス1号（御自由石）の事をふと、思い出した。

皆の視線が御自由石と同じくL C H R配置のパタ士長へと集まる。

「ん？ 御自由石？ あの馬鹿なら、なんか『幹部になる』とか言
ってたなあ」

「『ハアアア？』」

その場にいた全員が呆れた。

「馬鹿だろ。って言うか馬鹿だったな」

「馬鹿の馬鹿たる所以だな」

「カンブってアレだろ、『患部』の方」

何だかよく分からないが、御自由石は佐世保からこのかた、幕僚
寢室に半軟禁状態だったらしい。んで、その時に『幹部（患部？）
を指す』とか吐かしたらしい。

「クソだな。あの野郎が幹部になんかなったら『日本は終了しまし
た』って電光掲示板に表示されるぜ」

「もしそうなら自衛隊辞めよっと」

「いつそ海賊王でも目指すか？」

「やめとけ」

ダラダラしている間も時間は過ぎ、椅子をガタガタいわせながら
兵隊達は立ち上がる。

「そろそろか」

「ああ。時間だ」

ゾロゾロと上甲板へと向かう私達。

私はコッソリと食堂を見回したが、既に『たちかぜ』は居なかつ
た。

『弾薬陸揚げを行う。運弾通路での火気使用を禁止する』

真っ赤なB旗が掲揚され、弾運びが開始される。

1発32kgもある弾頭を9発載せたエレベーターが甲板に顔を出し、兵隊は弾頭を肩に担いでエッチラオッチラ運ぶ。頭に金属製のカバーがついているのが電波弾で、それが無ければ通常弾や擬製弾だ。

「約200発か。爆発したら死ぬな」

「電波弾触りたくねえー」

トラックに積まれ、運ばれて行く弾頭を眺めながら肩をコキコキ鳴らしていると、S原士長が深刻な顔をしていた。

「肩にキてるんですかい？」

「いや。少々不思議な事があつてな」

S原士長は珍しく真面目な顔をして言った。

「この艦、装薬より弾頭が多いんだが、何でだ？」

「擬製弾の分じゃないですか？」

「いや、それを抜いても多いんだ」

ふむ。確かに不思議だ。

私に言える言葉はただ一つ。

「Just unknown」

「コード601」

後ろからアザミンが言った。

「エヴァンゲリオン？」

「そ。」

「チッ。海上はエヴァヲタが多過ぎるぜ」

S原士長は舌打ちしていた。

「艦艇に乗ってるヤツはエヴァヲタだ！ 艦艇に乗ってないヤツは訓練されたエヴァヲタだ！」

この人も何を言ってるんだかね。

「ホント、艦艇勤務は地獄だぜ！ ヒヤハハハ〜！」

アザミンも何かワケが分からない事を言っつてS原と笑いあった。

……後で知った『フルメタルジャケット』という映画のセリフのパロディらしい。

「二人で馬鹿笑いしちゃってさ。君達、妙な”ネタ”でもキメてんじゃないの？」

何と無く疎外感を感じる私であった。

弾頭を片付けた後には、装薬の陸揚げが待っていた。

5人程で2甲板の床にある丸ハッチから装薬庫に降りた。

アルミ製の安っぽい桁を外し、15kgある装薬をリレー方式で2甲板へと上げる。

上で受け取った人間は、装薬を肩に担いで陸まで運ぶのだ。弾頭と違ってエレベーターは無い。

「3吋なら楽だったのか!？」

「バ〜カ。3吋は弾頭と装薬が一体式だろ」

等と言つて会話を交えつつ、ドンドン装薬を送る。

「ああ、本当に弾頭の方が多いや。」

「数えたのかよっ!？」

パタ士長が驚いてましたが、数えました。確かに弾頭の方が多かったです。

なにはともあれ、約9トンもの爆発物を降ろした『たちかぜ』は、少しだけ安全且つ身軽になり、それに伴い戦闘艦艇としての能力を失った。

作業終了後、私は2CICでだらけていた。

「弾頭1発30万として、約6000万円、か」

ミサイルは1発で6000万円だと聞いた。

「失ってしまった戦闘艦としての存在価値・・・プライスレス。」

2CICには私以外に誰も居なかった。

T山3曹は初任海曹課程に入校した。剥田2曹は、『たちかぜ』の後釜となる『さわかぜ』を受取りに行った。

『お嬢さんを下さい!』とばかりに『さわかぜ』を受け取りに向かった人間は、20名近くいたはずだ。『たちかぜ』の定員割れは、さらに酷くなった。

「戦い難くなりにはけり、か。・・・かつたる。」

落ち込んでしまいそうなのは全て、弾運びで疲れたせいだと考えたくて肩を鳴らしていると、背後に誰かが立つ。

「かつたるい、という言葉はですね……」
聞き慣れた声に振り返ると、そこには更に薄くなった『たちかぜ』
がいた。

「腕かひなたるし、という言葉が語源なんです」

「流石は姐さん。物識りですね」

『たちかぜ』は私のセリフに何故か口を尖らせて抗議する。

「『姐さん』は止めて下さいと、30回は言っただけですよ」

「3回言つて聞かない人間には、何回言つても無駄って言いますよ」

「……ハア」

『たちかぜ』は心底呆れたようなため息をついた。

「それにしても……」

「うい？」

あまり美味しくないインスタントコーヒーを飲みながら、『たちかぜ』が呟く。

「二等海士長はひ弱ですね。昔は砲が2門あったから、一日仕事でしたよ」

「作業量倍か。いやだなあ」

後艦橋に司令部作戦室が無く、砲が載っていた昔の姿を思い出す。

「どうせ役に立たないモノを、2門積んだからって……」

つい、口を滑らせて、言うべきではない事を言ってしまった。
しまったと思った時には遅かった。

「……」

『たちかぜ』は、悲しそうな表情で私を見つめるだけであった。

暫しの沈黙の後、『たちかぜ』は、

「コーヒーごちそうさまでした」
そう言って出て行ってしまった。

「俺の馬鹿・・・」

私は『たちかぜ』を追い掛けることも出来ず、ただ自己嫌悪に浸るのみ。馬鹿なのは自明だったが、ここまでとは……。

「若さ故の過ち・・・いや、ただの馬鹿だな」

さて、私の言葉により、ひどく傷付いた『たちかぜ』。

通常なら、艦魂が落ち込めば艦本体にも悪い影響が出る。

しかし、既に機関をバラして部品を陸揚げし、兵装の一部も撤去して落ちる所まで落ちた【護衛艦『たちかぜ』】は、不具合が不具合として抽出される機会もなかったのだ。

【オマケ】

『ミサイルの降ろし方』
『準備』

まず、命令の日時を確認し、付近の艦艇及び部隊に通達する（無

線以外の手段を使用)。

予定日に付近の艦艇が、弾薬の搭載・揚陸、補給品の搭載、燃料搭載等を予定していた場合、調整してずらす。

『当口』

クレーン車とミサイルコンテナ、ミサイルカーゴを用意する。

作業中は岸壁の通行を制限し、付近を航行する艦船に注意する。

また、停泊艦のレーダーが封止されていることも確認する(殆んど有り得ないが、近接信管が作動する危険がある為)。

『作業』

後部構造物の倉庫から『かたつむり』と呼ばれる器具を出す。

ランチャーを水平にして『かたつむり』を先端に取り付ける。

『かたつむり』にエアホースを繋ぐ。

ランチャーを装填位置にし、ミサイルをロードしたならば、所定の方位・角度にランチャーを指向する。

ミサイルコンテナを解放し、クレーンでカーゴを吊り上げる。

ランチャーにカーゴを接続する。

『かたつむり』でミサイルごと移送を前進させ、ミサイルをカーゴに固定する(ラッチのかん合をしつかり確認すること)。

カーゴとランチャーを切り放し、カーゴは岸壁側に持って行く(揺れ防止に、ロープ等で繋いでおく)。

ランチャーは装填動作に入る。

ミサイルがうまくコンテナに入るようにカーゴを降下させる(ミサイルとコンテナ双方に、センター位置が表示されている)。

ミサイルがうまくコンテナに収まったなら、カーゴとミサイルを繋ぐラッチを解放する。

以上、繰り返し。

『たちかぜ』は、25発以上のミサイルを搭載していたわけで、海曹の話が確かなら、1発が6000万円、600kgもの大物だ。

まさしく『宝』である兵器や隊員を消耗する戦を嫌う軍人は、結構多い。

第10話：陸揚げ作業と馬鹿（後書き）

二等

「そろそろ『たちかぜ』の最後が近いな」

まあ、護衛艦としては数えられなくとも、艦は2年も存在して
いたがな

第11話：ネガティブ（前書き）

今回は装備品に触れてみよう。

【チャフ】

地味な兵器ナンバーワンな兵器です。

意外と知られていませんが、型式は同じなのですが2種類あります。

1つは良く知られている広範囲に拡散し、『目隠し』『霧』になるタイプです。

もう1つは、自艦と同じ範囲（『たちかぜ』なら140m×10m程）にひろがり、『囷』や『影武者』の様になるもの。

この2つ、個人的には『タコの墨』と『イカの墨』のようなモノだと考えています。

第11話：ネガティブ

「総トン数ヤベエ」

相当ヤバイ、という意味の言葉を口にして、加TOW士長が唸った。

2006年、12月。

『たちかぜ』は全ての機能を停止。乗員は物品の返納や処分を追われており、私も陸おかに設置されたシュレッダーを使って機密文書の破棄を行っていた。

「『UYA14』、『モード4』……。北韓にでも持って行けば、高く売れるだろうな」

数字の羅列や英文の書類をシュレッダーに流し込みながら、ため息をつく。

終わりが見えない。

処分する書類はCD5だけで段ボール5箱にもなり、艦全体では『何枚』とか『段ボール何箱』ではなく、単位は『tト』を使わなければならなかっただろう。

その量だけでも気が狂いそうなのに、シュレッダーされた書類の屑が宙を舞い、鼻や咽に張り付く。いくらかは肺まで到達したかもしれない。

「塵肺になったら、労災おりますかね？」

「無理だろ。・・・ドック中の錆打ちじゃないけど、防塵マスクが欲しかったな」

加TOW士長は1分隊先任兵長で、7年近い年季の人だった。当然、制帽はトンガっている。

「二等^{ニト}ちゃん、そろそろ舷門交代だろ？ 後は任せろよ」

「お願いしてもよろしいですか」

手をヒラヒラさせて早く行くように促す加TOW士長。

残りの処分書類はミサイル士達から渡された通常書類だし、加TOW士長も取扱い者なので任せて安心だ。

私は作業をお任せして、当直交代の為に艦へ戻った。

2CICで制服に着替えて舷門へ向かい、前直の2分隊員から申し送りを受ける。

「本日の日出没……。満潮干潮は見ての通りです。月齢は12。」

「了解しました。……この作業予定は？」

舷門のホワイトボード、午後の予定にデカデカと【高所作業1件、業者】という風に書かれていた。

「あつ。それは第2MACKでの作業です。3次元レーダーを降ろすそうで……」

「……」

レーダーは予備品として確保されるらしかった。

「その他、第1内火艇が後部係留中です。覆いをかけていないので、

雨がふつたら『内火艇覆いかけ』をかけるように当直士官から言われていきます。以上です」

「了解しました。それでは交代します」

前直員の隣に並び、前直員の号令で気を付けをする。

「当直海曹！ 舷門当番交代します！」

「交代しました二等海士長！」

「ご苦労さん。前直は別れていいよー」

前直員は舷門のゴミを回収して艦内に入っていった。

ちなみに、私は第3直の当番として勤務に就いたわけだが、この第3直16 〳2 まだが基準勤務時間だ。しかしまあ、実際の当直交代は五分前の五分前の五分前……つまり15分前……であり、しかも海士は海曹よりも早く行動しなければならないので、154 ぐらいから舷門辺りをうろつく海士が多い。

もう一つついでに。

『たちかぜ』は護衛艦隊旗艦であり、岸壁に係留されることが多い。直接岸壁に係留された艦の立直者は制服（夏季の海士は略衣）での勤務だが、外側に係留された艦の立直者は乙武装（作業服、ライナー、弾帯、警棒、脚はん）での勤務となる。

交代してすぐに、私は食事を摂りに船基分^{ふなきぶん}……横須賀基地業務隊船越地区分遣隊……の食堂に向かった。

既にボイラーも無い『たちかぜ』は、自艦では調理すら出来なくなっていた。だから、乗員の食事は陸の食堂を使用した。

艦魂の『たちかぜ』の食事は……正直な所、分からない。たまに私が買って来た菓子やパンを食べていたが、それ以外は他艦に”お呼ばれ”でもしていたかも知れない。

可能性としてはもう一つ、機能を停止した艦艇の魂には大したエネルギーは必要無いから、食事は摂っていなかったとも考えられるが、それはあまりに哀し過ぎるだろう。

「るふう……」

最近はため息をついてばかりだ。

『たちかぜ』に対して非道い事を言ってしまったと思う。どうにか謝りたいが……。

「ドコにいったんだよ……」

アレ以来、『たちかぜ』は私の前に姿を現していない。いったい何処をほっつき歩いているんだか。

「気になる。心配だな」

徐々に存在が薄くなってきた『たちかぜ』である。知らないうちに消滅、という事になってしまっただけは目もあてられない。

私に何が出来るという事も無いが、会って話しかけたかった。

しかし……

「マイク『巡検終わり。明日の日課、^{あしたのしごと}定時起床・予定表通り』」
「了解。マイクいれます」

サイドパイプで雑礼を吹き、言われた通りのマイクをいれる。

1930の巡検終わりのマイクが、3直の最後の仕事と言っても良い。

残りの時間、私は舷門周りを片付けて過ごした。

次の直が交代に来ると申し送りを行う。

翌日の日出没、現在の内火艇の状況、早起こし……士官室係り等が、配膳準備の為に総員起こし前に起こしてくれるように頼む事……の時間や人員を申し送り、私は下番した。

作業服に着替えた私は風呂に入りに行った。しつこいようだが、『たちかぜ』は既にボイラーが機能を停止している。だから乗員は入浴に陸の浴場を借りていた。

入浴を済ませてサツパリした私は『たちかぜ』の搜索を開始。とは言っても、CICや3次元レーダー機器室の扉が施錠されていたりと、捜せる範囲は狭い。

捜せる範囲が狭いせいとか、それとも私は心の何処かで『会いたくない』と考えていたのか、『たちかぜ』は見付からず、夜間立直の時間が迫った。

「0137か……。仕方ない、諦めよう」

夜間の2、3直は深夜直とも言い、作業服で立つ事が出来るので着替えの時間が必要ない。それでもギリギリの時間だった。

再び申し送りを受け、舷門に立つ。

「ふぁ。ねむ」

クソ寒い中、頼りないストーブと睨めっこしていると眠くなる。眠気覚ましと周辺の警戒を兼ねて2、3歩外に出て背伸びをし、ストーブの前に戻って首だけ外に出しつつ暖まる。暖まって眠くなったらまた外にでる。以上、繰り返し。

「眠いよー、寒いよー、暇だよー」

当直海曹は休憩に入っており、舷門には私一人。人の出入りも無い。『たちかぜ』もいない。

「暇だあー！・・・はあ」

文句を言っても何にもならず、私は口を閉じた。

私は暇潰しに自分の心を観察してみた。

(『たちかぜ』と話たいのに、何故か会いたくないんだよな) 何故、会いたくないのか？

会って謝って関係を改善して元通りの仲の良い先輩後輩に戻って……。
会いたくない理由が分かった。

「別れが辛いんだな・・・」

たとえうまく仲直りしても、あと一月もすれば『たちかぜ』は除籍されてしまう。・・・辛い別れが待っただけだ。

ならば、いつそ険悪な仲で別れた方が気は楽だろう。確かに『たちかぜ』との不仲は問題だが、どうせ除籍されて沈められる艦だ。

艦の沈むのとともに問題も解決……いや、消滅する。

仲直りしても何も得られないなら、何かするだけ無駄だ。
放っておけば良いのだ。

「最終的解決かあ」

何もなくて良いというのは、非常に魅力的な話だ。

つまり、人が人ではない存在と歩みを合わせる事には無理があるのだ。無理はしないほうが賢い生き方だ。

午前3時50分、4直と交代し、4時前後の早起こしは3直で済ませる事などを言って、私は下番した。

2006年12月22日。準備が終わり、ついに『たちかぜ』から3次元レーダーのアンテナが下ろされた。

護衛艦『たちかぜ』には何の戦略的・戦術的価値も残っていない。

しかし恐ろしい事に、戦闘単位としては何の能力も残っていないはずの『たちかぜ』の魂は、未だに【軍艦】として存在していた。

私は『たちかぜ』の姿勢を見て、軍人という存在の恐ろしさと、自分の矮小さを知る事になるのだが、その話は次回にしよう。

第11話：ネガティブ（後書き）

一土

「たまに思うが、お前の精神って病んでるよな」

作者

「何を今更」

たまに作中の二等海士長の言動に矛盾が有りますが、テンションの上下・落差が激しかったせいであります。

第12話：愛あつての守護者（前書き）

今回は二等海士長のポケットの中身を見てみよう。

1：尻ポケット

軍手と手拭いが入っている。手拭いはタオル地も可な部隊とタオル地は禁止な部隊が混在している。

2：胸ポケット

メモ帳と筆記用具が入っている。自衛隊では『ヘルメットを被ってなかつたら死んでいた』状況よりも、『メモ帳を持っていなくてブツ飛ばされる』状況の方が多い。筆記用具は3ミリ・水性のボールペンが必要。

3：ズボンの前ポケット

ハンカチ、ティッシュが入っている。必要ならば煙草やライターも入れる（二等海士長は煙草は吸わないので持たない）。2年目からは『ギャッツビー』の汗拭きシートも入れていた。暑い地方に行く場合は必須で、変わった使い方としてはプロット板等のチャイナペン（グリースペン）を消すのにも使えた。

第12話：愛あつての守護者

『頑張れ／助けは必ず来るぞ』

「何を頑張れって言うんだよ。必ず来るって保証が何処にあるんだよ。適当いいやがって、殺すぞ」

初っ端から荒れている理由。それは非常糧食の文面がムカついたのと、味が甘つたるい上にパサパサしていて喉が渴き、遭難中にこんなモン食べたら余計に苦しくなると思ったことと、【消費期限：2006年10月】という表記に食べてから気付いたためである。

ちなみに、当時は2006年12月後半。

「まだ残ってるぞ、タバーリツシユ。どんどん食え」

「食つても良いが、タバーリツシユ『同志』はよせ。イワンの馬鹿が感染する」
気心の知れた同期達と話ながら、ダラダラと消費活動に勤む。

『たちかぜ』の食堂には、不要になった乾パンや非常糧食、食器等が並べられ、大処分市・閉店セールとなっていた。

「一番人気はスプーン・フォーク・ナイフか。5分で完売だな」
海自【錨に桜】のマークが入った食器は瞬く間にお持ち帰りされてしまった。

「確保出来なかった」

「二等はまだ良いじゃないか。士官室係りの特権で、士官室から海自マーク入りのコーヒークップと受け皿を確保しただろ」

パタ士長の言葉に、S原士長もウンウンと頷く。

「やたらデカイバッグを持ち込んでると思ったら、そこにあった『ノリタケ』の大皿を入れてるからな」

「ああ。アレは良いモノだからな」

この時確保した皿は、欲張って4枚程バッグに入れて運んでいたら、重すぎてバッグの持ち手が千切れるというアクシデンツに見舞われたが、今も実家に置いてある。

「あんな良いモノがタダで手に入るとはね。良い年末になりそうだが、そうか。それじゃあ、より良いモノを手に入れる機会を与えようか」

そう言っつて後ろに立ったのは、掌砲術士（1分隊の准尉）だった。

「いや、助かるよ」

「はあ」

にこやかな掌砲術士とゲンナリしている私は司令部公室に来ていた。

掌砲術士に押し付けられた仕事は【司令部公室のお片付け】というもの。

調味料や要らない食器の処分が主な仕事だが、本来は公室係りの役目である。

しかし、公室係りは既に転出してしまったため、似たような立ち位置の士官室係りにお鉢が回ってきたのだった。

「あゝあ」

私の他にもう一人、士官室係りが作業に刈り出されたのだが、途中でパートの作業が入ったとかで居なくなってしまった。補充は無い。

「ゴメンねー。俺も手伝うし。・・・そうだ」

掌砲術士は近くに置いてあった畳まれた布を渡してきた。

「お礼にソレを上げるからさ」

「何ですか、コレ」

良く分からない物を【お礼】とか言っただけでも困るんだけど
……等と考えながら少し広げる。

「ぶっ！」

布には直径30センチ程のワッペンみたいな物が縫われていた。

日本列島に錨のマーク。周りには【COMMANDER FRE
ET ESCORT FORCE】【JMSDF】の文字。

「護衛艦隊司令部のテーブルクロスだよ。要らないなら棄てるけど」
「頂きます！」

正直焦った。

掌砲術士が棄てるのか誰かにやるのか決めて良いのか？という
疑問はあったが、『さわかぜ』に護衛艦隊司令部が乗らない以上、
公室関連の物品はほとんど廃棄される運命にあった。

(コレを捨てさせちゃならねえ)

そんな思いがあって、私はテーブルクロスを引きとった。

思いがけない品物の登場に舞い上がる私を見て掌砲術士はニヤリ
とした。

「喜んでもらえて何よりだ。さあ、報酬分の仕事はして貰うぞ」

「了解！」

舞い上がっていた私は、掌砲術士の顔がいつもよりテカっていることに気付かなかった。

「飴とムチだなや」

私は鉄帽テツパチを抱えて岸壁を歩いていた。

食器室と公室の片付けは終わったのだが、掌砲術士に幕僚寢室の片付けまで頼まれたのだ。

「喜んで見せたのが悪かったのか・・・」

掌砲術士は私の喜び様を見て、作業を任せても不満は言わないだろうとふんだらしい。

確かに、幕僚寢室を片付けるだけなら不満は無い。むしろ、司令部要員の捨てた【護衛艦隊グッズ】を拾う良い機会だ。

しかし、片付けの最中、海曹から……

『おい、二等。片付けやってるんだったら、ついでにコイツも頼む。』

そう言っつて鉄帽を渡された。

『鉄帽の返納は終わったはずでは？』

『それがな、返納する時は探しても出て来なくてな。何故か今になつて出て来やがった』

ため息を吐く海曹ですが、本当に溜め息をつきたいのはコッチの方です。

『とりあえず、雑金で捨てていいからよ』
『分かりました。捨てて来ます』

そう言つて私は鉄帽を抱えて上甲板に出たのだが、何の連鎖か、通りがかりの海曹に更にゴミを押し付けられた。

『二等。鉄帽を棄てにいくならコイツも雑金で捨ててくれ』
何か知らないが、ドライバーやらスパナを鉄帽に突っ込まれた。

『あ、あの〜』

『ん？ どうした』

『いえ、何でもありません』

重すぎるので断ろうかと思つたのだが、それは無理というものだった。ペーパー土長の扱いはコンナもんだから。

金属類回収のコンテナ（旧係留位置のF-10にあった）までフウフウ言いながらゴミを運ぶ。

「何でこんな重い思いをせにゃあなんのだ！」

意図せず（しかもクソくだらない）ダジャレが出てしまい、非常に気分が萎えた。

腕がつりそうになりつつ、ゴミを回収コンテナにぶち込んだが、少々勿体なかった。

鉄帽は1つコレクションしておき、1つはマニアに売れば良かった。
た。

工具類も中古屋に売れば小遣いにはなつたかもしれない。

さて

想定外の雑用で疲れてしまったが、なんとか司令部要員の寝室の片付けに復帰した私は、順調に部屋を片付けたり荒らしたりした。そしてついに、ある部屋の前にたどり着く。

最後に残っていたのは【司令寝室】……。その辺の護群の司令ではない。【護衛艦隊司令】の寝室である。

護衛艦隊旗艦と言うと、昔で言う『長門』『大和』『武蔵』的な位置だ。個人的には『たちかぜ』は『大淀』と良く似ているのだが……。まあ、誰に似てるかはどうでも良い。

艦隊旗艦だが、陸に司令部の施設があるので艦に司令部要員が乗るのは昼食の時くらいだ。昼飯を艦艇で食べるだけで乗り組み手当てが貰えるなんて、艦隊司令部は舐めてやがる、という意見は耳にタコができる程聞いた。今は規則が変わったらしいが。

『艦に司令部があまり乗らないのは都合が良い』
『たちかぜ』がそう言った事があったが、私はそんな細かい事は忘れていた。

何も考えずにドアを開けた私の前に、どうにかしてもう一度会いたくて、もう関わりあいになりたくないと思った相手があった。

使われていない部屋、旗艦、艦魂……。少し考えれば予想出来たはずだった。

部屋のベッドに腰掛けてコーヒーを飲んでいる見慣れた人物。

「『たちかぜ』?」

「二等海士長、何でココに・・・」

慌てた様子の『たちかぜ』は、ふんつ、と気合いを入れて立ち上がった。

「どうしてこの部屋に?」

「掌砲術士に司令部要員の寢室を片付けるように言われて片付けに来たんですが」

「そう言えば、今日はそういう予定がありましたね」

私の答えに納得したのか、『たちかぜ』は思い出したように言った。

「不用品を持って行くんですね? なら、私の私物は避けておかないといけませんね」

『たちかぜ』はそう言っただけで近くの棚に手を伸ばした。

「手伝いは必要?」

「いいえ。二等海士長はお茶でも飲んでいて下さい」

棚から書類を取り出す『たちかぜ』から言われて、机の上に置いてあるお茶セットに手を伸ばす。

「あれ?」

急須の横に置いてあった甘味は、私が百貨店で買ってきた黒砂糖だった。まともな食生活しているのだろうか?

「『たちかぜ』姐サン。あんたの食事はどうなって・・・のうっ!?!?」
心配になって振り返りながら訊いた私の前には、うず高く積みま

た書類の山があった。

「何処から出したんだ」

「棚からですよ。無理矢理押し込んでましたから」

だからか、棚は微妙に歪んでいるように見える。

「艦魂の便利能力【無限収納】と【具現化】を使えばいいのに」

私がそう言うと、『たちかぜ』は困った顔をした。

「具現化にも力が必要なのですよ。今はともかく、私はこの先弱っていきますから」

それ以上聞きたく無いので、私は立ち上がって片付けに入った。

『たちかぜ』も、察してくれたのか黙っていた。

私が棚をガサガサあさりながら片付け、『たちかぜ』はそれをつ立っただまま見ていた。

何だか既視感がある。

（そつえば幹部って、掃除に行くといつも立っていたような・・・）

士官寝室へ掃除に行くと、大概の幹部は立ち上がっていたものだ。

兵隊の前では休まない、将校は弱みを見せない、という事だろうか？

「そこまでして、何で『軍人』であろうとするんだ」

もう、関わるのは止めようと思ったが、どうやらソレは無理なようだ。

「何がですか？」

キョトンとした『たちかぜ』に、私は言う。

「自衛艦籍じゃなければ、普通の船や人なら・・・」

「それは私たちかぜではありません」

『たちかぜ』は私の言葉を遮るようにピシヤリと言った。

「私は護衛艦です。この世から消滅する瞬間まで『恐るべきものである事が使命です』」

(狂ってやがる)

そこまでして守る価値が日本にあるか？ そう思ったのだ。

「そこまでして国家を守るのか？ 国なんてフィクションだぜ」

「国というものは一種のシステムですから、確かな存在ではありません。ですが」

『たちかぜ』は毅然として言い放つ。

「そこに生きる人は現実です」

「赤の他人じゃないか！ しかも、自衛隊を疎ましく思っている人間だつて多いんだ！」

無様にヒステリーを起こした私の頭を、『たちかぜ』は優しく撫でた。

「それは違います。赤の他人なんて、私たち艦魂には居ません」

優しく、全てを包み込むような声で『たちかぜ』は話す。

「私達は国民の血税を使って建造されました。実際には税は血ではありませんけど、国家にとっては血液みたいな役割をしますよね」「あまり綺麗な話じゃないですがと言つて『たちかぜ』は微笑む。

「国からつけた血は、元は国民の皆さんが納めた血税です。なら、私たち艦魂は国民全員と血が繋がっているんです」

だから、他人なんかいない。血が繋がっているから……

「家族なんです。艦魂にとっては日本人はみんな家族なんですよ。だから、私達は国民を守りたいと思つんです」

「『たちかぜ』、俺は……」

何も言えなくなつた。

艦魂にそんな想いがあるだなんて、知らなかつた。

私は艦魂の想いに畏れを抱いた。

軍人が、そういう考えの下に国民総てを守るものだったとは。

艦魂の想い知り、それを畏れるとともに恐くなつた。

自分が、守る立場に居る事が。

『たちかぜ』を喪う事が……。

別れはすぐそこまで来ていた。

第12話：愛あつての守護者（後書き）

守る理由か。相変わらずブツ飛んだ考えをしているな。

二等

「だってさあ、理由もなく『守る』って意味だけあるのは違和感があるだろ」

赤の他人でしかも、自分達の存在を認めない相手なんて、理由もなく守らないからね。

二等

「艦魂つてのはやっぱり人間とは違うんだよ。日本人が全部家族つて、スケールでかすぎ」

第13話：『次』に向けて（前書き）

今回の前書きは本編とは全く関係無く、航空機の種類表記についてです

一般的なのは

【A〓アタッカー／攻撃機】 【B〓ボマー／爆撃機】 【C〓カーゴ／輸送機】 【E〓エレクトリカル／電子戦機】 【F〓ファイター／戦闘機】

例

『ECI-1』ならば輸送機改造の電子戦機。

他に

【K〓給油機】 【M〓掃海機】 【P〓哨戒機】 【S〓対潜哨戒機】
【T〓練習機】 【U〓多用途機】 【X〓実験・試験機】

が、あります。

第13話：『次』に向けて

2007年1月

私は『たちかぜ』の除籍を前に、4月から第1術科学校、海士電子整備課程への入校が確定した。

1月15日の『たちかぜ』除籍後は横須賀補充部附となり、4月までは陸警隊臨勤となる。

「術科学校か」

「身の振り方が決まったんだ。良かったじゃないか」

「ターター関連の書類を破棄しながら、パタ士長と話す。」

2月から第1術科学校、海士射撃管制課程へ入校するパタ士長はハリきつていた。

一方の私は、術校入校を喜べずにいた。

「海士CDS課程が無いなんて、不公平だ」

私は教育隊では2分隊電子整備員の教育を受けたが、部隊配属からはCDS員として1分隊でやってきた。電子整備員としての経験は皆無なのである。

他の艦の人間が知っている電子整備の知識を私は知らない。それに私は元々、化学や科学が苦手なのだ。高校の時は化学の試験で正答率12%という状態で留年しかけた事がある。

仮に修業したとしても、私の次の配置は電子整備ではなくCDSだという。

術校入校はほぼ無駄だ。

そんな事を考えながら歩いていると、士官室前にたむろする数人の海士と鉢合わせた。

その数人の中に、同期のアザミン士長を見つける。

「よお、二等。相変わらずパシリだな」

「アザミン士長、これから申告か？」

アザミン士長はコクリと頷いた。

「ああ。俺も江田島だからよ、先に行って待ってるぜ」

「わかってるさ。俺も後から行く」

ガシツと腕を組む私とアザミン。

それを見ていたパタ士長だが

「なんか、これから死に行くみたいな会話だな」

「・・・」

「・・・」

パタ士長の言葉に私達は固まった。

「パタ士長、そういう事は言わないでくれ」

江田島はいろんな意味でヤヴァイ所だと聞いていた。

縁起やゲン担ぎをしておかないと気が滅入ってしまう。

「ははは。悪い悪い。」

パタ士長は明るく笑った。

「なんだかんだ言っても、俺達はみんな江田島だしな」

「向こうで会う事もあるだろうし、また一緒にバカやろうぜ」

パタ士長と二人でアザミンをガシガシといじる。

「やめるよお、制服がシワになるだろ」

私達3人は、アザミンが申告の順番待ちをしている間、ダベって過ごした。

アザミンが申告の為に士官室に入り、私とパタ士長は作業に戻った。

「みんな、バラバラになっっていくなあ」

作業を黙々とこなしていたパタ士長が呟いた。

最初に配属された艦が『たちかぜ』だったということは、私達にとって不幸な事だったと思う。

私達同期の仲間が最初に顔を合わせ、馬鹿やってフザケあって笑いあった空間は、やがて消え去る。記憶や思い出は消えないと言うが、その象徴である『たちかぜ』の消滅はやはり、誰もが寂しく思っていた。

作業を終えた私は、上陸許可までの時間を潰す為に【幕僚長寝室】に来ていた。

幕僚長寝室は現在、司令寝室を書類に占拠された『たちかぜ』が避難して来ている。

「・・・まだやってたのか」

私が部屋に入ると、『たちかぜ』は書類の具現化の最中だった。

「二等海士長。少し、待っていて下さいね」

『たちかぜ』の手の中にうっすらと冊子が出現する。以前なら一瞬で具現化出来ていたはずの冊子は、もどかしい程の時間をかけて

姿を現す。

「ふう。出来た」

『たちかぜ』が自分自身の記録（航海日誌や訓練記録、物品表、『たちかぜ』の運用上の欠点や利点などや、甲板の何処が汚れ易いか、磨耗したか）を記載した書類を具現化しているのには理由がある。

艦魂が具現化させた物品は、艦魂の精神の一部だ。ということは、具現化させた主が消滅すれば、物品も消えてしまう。

『たちかぜ』の記録を次世代に活かしたいならば、記載された書類が『たちかぜ』の所有物であるのは都合が悪いのだ。

だから、『たちかぜ』は記録を書類として具現化し、それを他の艦魂へと譲る。誰に譲るかまでは教えて貰っていないが、横須賀周辺で誰よりも長生きで、今後も存在し続けるであろう艦艇を考えると答えは自ずと見えてくる。

だが、今回の冊子はどうも違うようだった。赤い表装に【NATO】の文字が見える。

「NATOコード？」

「ええ。米艦艇に返却しなければなりません」

『たちかぜ』は小さいクローゼットから制服の上着を取り出すと、【しっこらしゃん】と着込んだ。

「米軍基地へ行ってきます」

「・・・旗艦が一人でいくの？」

『たちかぜ』は護衛艦隊旗艦だが、そもそも護衛艦隊直轄艦は『

たちかぜ』だけなので従兵はいないはず。

私が着いて行くという手もあるが、多分に無理がある。

「大丈夫です。内火艇を連れて行きますから」

（え、内火艇って魂あるの？）

私が疑問を言葉にする前に、『たちかぜ』は転移してしまった。

「さて」

『たちかぜ』の居なくなった室内で、私はしばしボンヤリとしていたが、部屋自体には何の用も無いので通路に出た。

意味もなく、さ迷う。

「ん？」

ブラブラしていると、食堂から誰か出て来るのが見えた。

（アレは・・・）

3分隊の『太り過ぎで丸ハッチを通り抜けられない海曹』が、見えのある【赤白の布】を持って出て行った。

「艦旗、だな」

これまで使用していた艦旗はボロボロになり、薄汚れていたの新しい旗に取り替え除籍式に臨む事になっていた。そのボロくなっていた艦旗を貰って行ったのだろうか。

「惜しい事をしたな」

艦旗は私も欲しかったが、まさか持ち帰って良い品となっていたとは……。

食堂には未だに処分しきれしていない品物が並んでいる。乾パンや

小さい食器はもう無いが、巨大なカレー皿や鍋、水筒等が山のよう
に積まれていた。

「水筒、棄てていいのか・・・って、金具が腐ってるな」

水筒は肩からかけられるように紐が付いていたが、その金具は腐
食してボロボロだった。使う機会が無くて良かった。

「しかし、海上自衛隊のマークが入っている物を持ち帰って良いだ
なんて、何を考えてるんだ？」

実は何も考えてないだろうと思いつつ、水筒を確保する私。

「ありゃ」

私の視線は、ある所に引き付けられた。

壁にネジで留められているテールの上に、何かが乗っている。

知らない人間が見ればただの金属製のプレートであるソレだが、
表面にある【優秀艦】の文字がただならぬ。

「嘘だろ、コレを不要だと思ってるのか？」

そのプレートは『たちかぜ』の獲得した名誉の証であり、『たち
かぜ』の歴史を教えてくれるものでもあった。

それをぞんざいに扱うなど、精神を疑う。

「CPOのジジイ共め、除籍が寂し過ぎて頭がおかしくなったんじ
ゃないか」

私は毒吐きながらプレートをまとめた。

幸いな事に、私はこのプレートの本当の持ち主を知っているのだ。

「カエサルの物は、カエサルの元にカエサレルべきだ」

今度は意図して下らないダジャレを言って、私は幕僚長寝室へ向
かった。

私は再び幕僚長寢室に顔を出したが、『たちかぜ』は帰っていないかった。

仕方ないのでプレートは机の上に置き、メモ帳にメッセージを書いておく。

『このプレートも持って帰りたいだったが、私には重すぎた。名誉は貴女のものであるべきだろう』

(意味が通っていない気がするが、まあ良いや)

メモをプレートの上に置き、私は幕僚長寢室をあとにした。

【上陸員、上陸用意。応急隊A班ひらけ】

非番者には外出の許可が出て、当直の半分に食事の許可が出る。

「早く艦から遠ざかれ〜」

射撃の田中クマゴロウ2曹が総員離艦の心得を言いながら上陸して行った。

苦笑いしながら田中2曹を見送った私は、舷門当番の水野2土がウロウロしているのを発見した。

「どうした水野2土、いまさら艦内旅行か？」

「あ、二等海士長。」

何故かホツとした表情になる水野。藁にもすがる思いなのか？

「除籍式典の【と列員】に選ばれた人を探しているんです」

【と列員】とは、儀式などの際に列中に入らず出入口や通路の左右

に並ぶ飾り役だ。

今度の除籍式では、返納される艦旗を受け取る次官を迎えるために他の乗員より一足早く陸に降りなければならぬ。

「どうやら水野は【と列員】の名簿を持って歩き、各自に【と列員】に選ばれた事を通知して回っているようだ。」

「非効率だな。7、8枚コピーして各居住区と食堂に貼っておきやあ、万事OK・・・って言いたいが、コピー機がないんだよな」

残念ながら、コピー機は撤収されていた。シュレッダーならあったが。

「仕方ないな。もう上陸した人間もいるだろうし、通知は明日で良いだろう？ コンビニでコピーしてきてやるから、明日にでも貼ってまわれ」

「ありがとうございます、お願いします！」

水野から渡された名簿には、10人の名前が書かれていた。その中に、何故か私の名前もあった。

「なん・・・だと」

と列員に選ばれる人間は、ある程度の見映えの良さがなければならぬ。

と列員に選ばれて一足先に陸に降りたとしても、所属は『たちかぜ』である。

だが、

『たちかぜ』が除籍される瞬間に、既に陸に降りていなければならぬということとは、私の心を深くえぐった。

護衛艦としては最後の瞬間に、立ち会う事は許しても参加することとは許さない、と言われて拒否された気がするのであった。

第13話：『次』に向けて（後書き）

二等

「前書きと同じで本編とは全く関係が無いのだが、航空機で海上自衛隊に関係すると言うと、【S】【P】【T】【US】くらいか」「この間オーバーランした『YS』も在りますが、あれは自衛隊専用の機体名称ではないので例外です」

蛇足：艦魂劇場（前書き）

警報音など

戦闘配置

『カアン！カアン！カアン！カアン！』と鳴る。

ガス警報

『ファン、ファン、ファン』という音。戦闘配置より軽い感じ。

主砲旋回（作動確認）

『ジリリリリリ』とベルが鳴り続ける。

ターターランチャー旋回（作動確認）

『チリンチリン、チリンチリン、』と、ベルが鳴り続ける。

蛇足：艦魂劇場

自身の分身に近い『内火艇1号』を引き連れた『たちかぜ』が向かった先は、ある米艦艇の内部……本来なら存在しない空間を【内部】と言えるかどうかは置いておく……だった。

その艦は、絶大な力を持つ故に魂のエネルギーも有り余っており、実際の船体容量以上の空間を”具現化”により有していた。

その艦魂専用エリアの手前に少女が一人。

「ようこそ。フルカーネル『シャープ・ソード』」

「お久しぶりですね、『リスト』大尉」

ようこそ、と言う割にはまったく歓迎していない様子の『リスト』大尉と、『シャープ・ソード』こと『たちかぜ』は敬礼を交す。

「『^{ジュリヘット}内火艇1号』、ここまででいいわ。帰る時に呼ぶから戻って休んでいなさい」

「了解」

内火艇の艦艇魂が転移したのを見て、『リスト』が声をかける。

「『シャープ・ソード』大佐、司令が待っております。行きましょ
う」

「わかりました。……まずは書類ですね」

不機嫌を更に濃くした『リスト』を見て苦笑いしながら『たちかぜ』はそのエリアに足を踏み入れた。

「ご苦労様と言えはいいのかねえ」

司令室では身長一九センチを超える巨体の艦魂が長椅子に腰掛けて待っていた。

「『たち・・・』じゃなかった・・・。『シャープ・ソード』、あなたが居なくなると私は本当に寂しいよ」

「そうは見えませんが」 和名を言いそうになった司令艦は『リスト』大尉に睨まれ慌てて言い直す。その顔はむしろニヤニヤとしてご機嫌だ。

『たちかぜ』が『リスト』大尉を見ると、こちらはこめかみを押しさえている。

「再来年（2009）に『オーシャン・クイーン』が除籍されるから、司令はご機嫌なの」

「ああ、なるほど」

『オーシャン・クイーン』こと【地獄の『るな』】と呼ばれた艦魂と、司令の仲の悪さを思い出し、司令の機嫌の良さに納得する。

「DDHだか都々逸だか知らないが、生意気なのだ。我が空母をみならえ」

「私に言われましても・・・。『たちかぜ』に言ってください」
もはや形骸化している『たちかぜ』はそう言い、司令も頷く。

「そうだな。貴君に聞いてもらいたかったが、いささか話題が関係無さ過ぎた。『リスト』、お茶を用意してくれ」

「ラジャ」

『リスト』が部屋を出るのを見ながら、司令は『たちかぜ』に顔を寄せた。

「『さわかぜ』の名前を聞いて思い出した。『たちかぜ』、君の後継・・・護衛艦隊旗艦ではなく、フネとしての代わりの呼称が決まったよ」

司令はポケットからメモを取り出すと、『たちかぜ』に見せた。

「『ローズ・ソーン』、ですか」
「ああ。『バラの棘』だ。いい名前だろ？」

良い名前。確かに良い名前であった。

実は、『たちかぜ』は自分の名前にコンプレックスを持っていた。自分は国家の盾である護衛艦であるのに、与えられた名は『【太刀】風』。アメリカ側の呼称も『シャープ・ソード』。艦内神社の祭神は経津主命フシヌシノミコトで、何から何まで敵を討ち払う『剣』で有ることを期待され、抜き身の刀身は仲間を傷つけることも暫しあった。

「『ローズ・ソーン』が、皆に愛される艦になれば良いのですが・・
」

「なるぞ。きっと」
司令はノンビリとした様子で言った。

蛇足：艦魂劇場（後書き）

解説

【『司令』】

アメリカ艦艇の魂。空母と思われる。

【『リスト』】

アメリカ艦艇の魂。『司令』の副官。

【『ジュリエット1』】

内火艇の魂。船越停泊中の『たちかぜ』の呼称が『ジュリエット』で、第1内火艇が『ジュリエット1』。第2内火艇は『ジュリエット2』。ちなみに、表記は『J1』。

【フツヌシノミコト】

漢字で書くと【経津主命】か【経津主乃命】。刀剣の神様であり、名の【フツ】は剣の風をきる音を表す。

【『オーシャン・クイーン』】＝【地獄の『るな』】

DDH『はるな』の事。海士達は『はるな』を【地獄の『Hるな』HELLな』と呼んで恐れた。

【『ローズ・ソーン』】

茨と訳すべきか薔薇の棘で良いのか迷う。後に『あたご』と呼ばれる艦艇の呼び出し符諜。

言つまでも無いが、艦艇の呼び出し符は架空である。

第14話：さよなら『たちかぜ』（前書き）

ここまでお付き合い頂き、誠に有難うございました。

とうとう、護衛艦『たちかぜ』が除籍される時が来ました。

除籍式の前日には、翌日の艦旗返納のために状態の良い艦旗を用意し、『たちかぜ』は護衛艦としての最後の日を迎えます。

第14話：さよなら『たちかぜ』

2007年1月14日

神奈川県横須賀市 西逸見町1丁目無番地 海上自衛隊護衛艦『たちかぜ』

乗員は皆、荷物をまとめて艦を離れる準備をしていた。

持ち出せない、若しくは持ち出す必要が無い荷物は適当な場所に置き捨てて行く。

「非常時持ち出し……か」

以前は暗号機が納められていた金庫。それについているプラスチックの板に貼られたテプラを見る。

持ち出しは石井3佐となっていた。石井3佐は私が着隊した時の砲雷長で、2006年の春に『19型DDG』開発の為に引き抜かれた人だから、1年近く更新していないことになる。

消費期限切れの非常糧食といい、末期的と言える。

「まあ、そんなモンだよな」

私は最後に残っていた特通M型（モード4「味方識別」）に関する機密書類を破棄する。

『たちかぜ』は三次元レーダーという目と、暗号機という口を失っている。後は自衛艦旗を失えば、標的艦の出来上がりである。

「……最後か」

私は外の空気を吸いに、旗甲板へと出た。

灰色の空から冷たい風が吹き、濃緑色の波が艦を揺らす。微妙な上下運動とともに、もやい綱がギギツ、ギギツと音を発てる。

風が索を鳴らす音。波が外舷でチャプチャプといつている。……以前は機関音で掻き消されていた音が聴こえる。

どこか生き物めいたなまめかしさを持っていた外板は渴いてザラついた感触になり、色を失っている。私の意識がそう見せたのか、それとも……。

私は黙して港内を眺めた。

『たちかぜ』に着隊した時、夜の闇と不安で真っ暗だった。

日が経つにつれて徐々に仕事を覚え、周りを見る余裕が出来た頃、港内に潜水艦がいる事に気付いた。段々と薄汚れていき、いつの間にかいなくなっていた。

あの潜水艦がいなくなったのは、『たちかぜ』と出会った頃だったか。『たちかぜ』もカモメのフンで甲板が白くなってしまっのかと思うと哀しくなる。

何も出来ない事は分かりきっていた。それについては特に言うことは無い。ただ、何も出来ないのに船魂が見える事には理由があるのか、という疑問がある。

「多分、理由や意味なんか無いんだろうな」

おそらく、私と『たちかぜ』の出会いには何ら意味は無い。

私の人生と同じだ。生まれたから、とりあえず死ぬまでは生きる。

つまり、この世界と同じだ。存在しているから消滅するまでは在る。意味など無い。

仮に世界に存在意義があったとして、その存在意義の存在意義は何か、と考えていくと究極的に全て無意味となる。『平等に価値が無い』だ。

陽は傾きつつあった。寒さが針のように肌を刺す。

1日が終わる。明日からは今日までと同じ日常は来ない。

「……寒っ」

冷えた。体も心も底冷えするような寒さが襲った。

雲の切れ間から夕日が僅かに顔を出すが、それすらも寒さを引き立てるので、私は艦橋内に逃げ込んだ。

赤に染まる艦橋に影が立っていた。

沈む夕日に照らされ全てが赤く染まる艦橋にあって、何ものにも染まらない黒い影がこちらを向く。

「お疲れ様です、二等海士長」

その影は、真新しい制服を着た『たちかぜ』だった。

「お疲れ様です」

敬礼を交わす私達。私は『たちかぜ』の袖章が変わっていることに気付いた。

「姐さん、階級章が……」

「ええ。特別昇任で将補になりました」
そういえば、ウチの親も一佐昇任は特別昇任だった。

人間の退職時の特別昇任は退職金や年金を増すためだが、艦魂の特別昇任に意味が在るのだろうか？

『たちかぜ』は朗らかに喋る。喋り過ぎな程に。

「明日は特別な儀式ですからね。ちゃんと賞詞も外してあるんです」
「……さいですか」
暗くなる私に対し、『たちかぜ』はいつもより明るいくらいである。

「ひょっとして、俺の感覚がおかしいのか？」

「何がですか？」

「明日でお別れだって言うのに、全く悲愴感が無い。もっとこう、何と言うか……」

言いたい事を表現しきれないのでワキヤワキヤと手を動かす私。

『たちかぜ』はそんな私を見て苦笑する。

「別に私は明日で消えるわけではありませんし。まだ任務も残っていますからね」

某小説と違い、艦魂は艦が沈む瞬間まで艦にとどまり続ける。

なにしろ『Freet In Being』……艦艇とは存在する事に意義があるのだ。最後の瞬間まで在り続け、抑止力となる事を期待される。

当然、『たちかぜ』も最後まで艦にとどまる。

何より、『たちかぜ』の最期は……標的艦として沈む事は任務である。ならば、艦を降りる事に正当性は無い。

『たちかぜ』に限らず艦魂とは自らの職務と良心に忠実であるらしかつた。……それが良い事かどうかの判断は各々の判断に因るだろうが。

「正直、俺には理解出来んね。そこまで思う事が出来るというのは羨ましくはあるけれど、理解は出来ない」

「それで良いと思いますよ。貴方は私達とは違う生き物ですからね。立場も違います」

『たちかぜ』は何かを懐から取り出した。

「それは……」

「私の記録です。名誉ではなく、ね」

取り出したのは『アノ』プレートだった。

「これを貴方に預けます。私の我が儘ですが、貴方には私の事を覚えていて頂きたいのです」

「良いのか？ ……俺は自衛隊を辞めようと思ってるんだが」

私の問いに『たちかぜ』は頷いた。

「構いません。貴方が今後、どのような道を歩もうと、私の乗員であつた事に変わりはありません」

『たちかぜ』はプレートを押し付けるようにして渡してきた。私はソレを受け取ったが、やはり実際の重量以上のプレッシャーを感じてしまう。

「……コレに相応しい者が現れるまで預かっておく」

「そんな大袈裟なものでもありませんよ」

私がプレートをしつかり受け取ったのを見て、『たちかぜ』は後

るに下がる。距離6歩で敬礼を交わす。

「さようならば、お別れしましょう、姐さん」

「ずいぶん古風ですね」

ドコが冗談めかした別れの言葉。それが最後に交わした言葉だった。

翌日。

『たちかぜ』乗員は最後まで艦に乗せていた荷物を護衛艦隊司令部の建物に置き、除籍式に臨んだ。

私は行事の始まる前から艦を降り、と列員として並んでいた。

艦旗を降下し、乗員が退艦する。

誰も乗っていない元護衛艦は、ひどく小さく見えた。

私達が命を預けた艦はもう居ないのだと思うと、悲しくなった。

さよなら、『たちかぜ』。

第14話：さよなら『たちかぜ』（後書き）

作者

「やっと終わったあー！」

『フレンドリー』

「まだ終わったわけではないのでは？ バッドエンドに至ってないですし」

作者

「うるさいぞ、”大皿”。長距離ARMでも喰らって死んでろ」

『フレンドリー』

「酷い！」

二等

「まあ、確かにココで終わってしまったたら半端だよな。キッチリ閉めない」と

作者

「……ココで終わっていた方が綺麗な終わりだったんだけどねえ」

まだ続きます

そういえば、政権が交代しましたが、特に思う事は無いですね。人間、生きていて地面さえあれば何とかかなります。

蛇足：オラこんな部隊イヤだ（前書き）

陸警隊はイヤだ

陸警隊はイヤだ

術校さ行くだ

蛇足：オラこんな部隊イヤだ

例えば、出勤初日の面談で

『借財は有るか？』

と、訊かれて

『ありません』

と、答えたとしよう。

普通に考えて、

『正直に言えよ。100(万円)や200(万円)は借金の内に入らんからな』

なんて言われるだろうか？

「腐ってやがる」

陸警隊に臨勤となった私はクサっていた。

(ぶつちやけさー、陸警隊って掃き溜めなんだよね。病気持ちとかクズが本職でさ。一部は移動待ちかな)

ハッキリ言って北朝鮮の工作員が5人もいれば地方総監部は陥落させられた。

ひどい所だと聞いていたが、ここまで策だとは……。

警備の配置は【横須賀基地正門】 【横須賀基地北門】 【陸警隊】
【船越正門】 【弾庫】、そして【犬舎】。

【弾庫】 【犬舎】は別として、他は4〜5人が配置されている。
夜間は交代で一人ずつしか起きていない。では、警戒システムが
充実しているかと言うと……

ソナモノはナイ。

監視カメラは正門の1ヶ所しかない。

ろくなセンサーも無い。

見回りは一人だけで、自転車に乗って行っ

金網を破れば入りたい放題である。

「しかも、武器は警棒のみって、馬鹿か？」

武器は有るにはあるのだ。詰め所の金庫の中に。

金庫の鍵は総監部の当直士官が持っている。

コマンドによる奇襲をうけたら、当直士官は銃撃をかいぐり、
総監部の建物から約100mの距離を疾走して詰め所に駆け込んで
金庫の鍵を開くのだ。

ヒュー、カーッコー！。

「……死ね」

まあ、金庫から銃を取り出しても対応出来るかどうか分からないが。

『たちかぜ』から聞いた昔話である……

「何年前かにテポドンが発射された時は大変でした。態勢が上がりまして……」

『たちかぜ』は船越正門横の詰め所を眺めながら話してくれた。

「態勢が上がると、武器の準備をしなければならぬらしいんですが、『弾が無いから貸して欲しい』と言って来たんです」

コレを聞いて私は啞然とした。

「何だそりゃ、馬鹿か？ アホか？ 役立たずか？」

「陸警隊に対しては、身内も冷たいですから」

「たまに撃つ 弾が無いのが 玉に疵……か。馬鹿が。役立たずの集団め、死ねば良いのに」

とりあえず、海上自衛隊は基地警備を舐めている事がわかった。

(艦艇の一般公開とかで一般人が居るときに襲撃されたら、反撃も出来ずに皆殺しだらうな)

一般人を巻き込んでまで反撃したら、後が大変だからおとなしく死んでおくのだからな。そんな事を考えながら、陸警隊での勤務期間を過ごした。

蛇足：オラこんな部隊イヤだ（後書き）

作者

「陸警隊と特警隊は無関係」

陸自と空自には警備職の術科学校はありますが、海自にはありません。

皆さん、護衛艦を殺りたければ、入港中を狙いましょう。

蛇足：ニート海士長と呼ばないで（前書き）

まずは謝罪します。

申し訳ありません。

なぜ謝るかと言いますと、今回は書いていて非常に萎える話だったからです。テンション落ちまくりです。結果、最後はグズグズです。過去の事だから割り切って書けるだろうと思いましたが、全然ダメでした。

書いている人間がコレですから、読者の皆様にも不快な思いをさせてしまうと思います（特に文章力の不足で）。構成などでどうにかしたかったのですが、無理でした。

誠に申し訳ありません。

蛇足：ニート海士長と呼ばないで

私がXbox360で【地球防衛軍3】をプレイしていると、S原士長が【ゴッドファーマー】を持って来た。

「怠惰な生活をしてるな」
開口一番がこのセリフだ。

「トライド・アウトな生活？ なにそれ？」
私はマトモに応えるつもりもない。

「怠惰だ、怠惰。トライアドなんて言っていない」
「……なんか微妙に違う気がするけど。まあ、いいや。ゴッドファーマーはどうだった？」
「良かったよ。」

S原士長は私がプレイ中の画面を見ながら腰を下ろした。

「やっぱり市街戦にはロケットランチャーが必要だな。地球防衛軍の後でゴッドファーマーをやって痛感したよ」

「……どうやら、我々の脳ミソは同じモノで出来てるみたいだな」
私達は市街戦における爆発物の有効性を語りあった。

「そついえば今日、2boyツボーイに会ったぞ」
「2boy……？ ああー、居たな、そんな奴も」

KSCの電動ガンをいじりながら教育隊の同期を思い出す。同じ班に確かに2boyはいた。

「で、2boyがどうしたって？」

「二等と同じ課程に入校するんだとさ」
ふむ、懐かしい顔が見れるわけだ。

……まあ、懐かしいどころか忘却の彼方へと消えていたのだが。

「掃き溜めへようこそ、ニコラス」

「……なんだよ、ニコラスって」

2月の後半、2boyが『しらゆき』から陸警隊に臨時勤務に来た。2boyはニコラス「ケイジを和風にしてカツコ悪くしたような顔である。」

「ま、それはソウトして」

「話を勝手に置くなよ」

「いや、トコthou_{トコ}ghtなら『置く』じゃなく投げたんじゃないか？」

この時期には既に私は言葉で遊ぶのが好きだった。

「一ヶ月も陸警隊に居たら根性が腐っちまいそうだが、頑張って乗り切ろうや」

「そんなにひどいトコなのか。嫌だなあ」

陸警隊はギャグだった。どこの世界に夜食のカップ麺の銘柄が頼んだモノと違うからと殴り合いの喧嘩する曹長と一曹が居るのか？

幻滅

ここまで来ると、『死にたくないし、殺したくもない』という思いより、『馬鹿馬鹿しくってやってらんない』という気分の方が勝っていた。

2007年3月13日、

この日、私と2boyは新幹線に乗って移動した。身分的には『横須賀補充部附陸警隊臨勤』から『横須賀補充部附第1術科学校第××期海士電子整備課程入校』となった。

術校入校の前に2boyから私生活の話を聞いたのだがその中にもでたい話が一つあった。

「実はさ、彼女に子供が出来ちゃってさ」

「ふーん、そいつはオメデトウ。って、出来ちゃった婚か！」
中々やりおるわい。

「俺は避妊しようとしたんだ。だけど、足で押さえられて抜けなくて……」

『は、放せえっ！』と、叫んだが放してもらえなかったらしい。

「ブハハ！ じゃあ、子供の名前は『はなせ』だな！」

「マジふざげんな、そんなの絶対に付けねえし」

2boyはむくれた。

「じゃあ、『グレゴリウス』はどうだ。ロシアのツアーの地位も狙えるぞ?」

「付けねえよ!」

「そうか、それは残念だ。で、結婚はいつに?」

私はふぎけるのも飽きてきたので顔面に真面目さを張り付けて尋ねて見た。

2boyは少し考える素振りをした。

「江田島にいる間は無理だよな。やっぱり課程修了後になるかな」
「そっか」

新幹線の車内で、2boyは富士山を眺めながら呟いた。

「俺さ、この課程が終わったら結婚するんだ」

「2boy、最近はそのういのを”死亡フラグ”って言うんだぜ」
海上自衛隊だと洒落にならん。

「何だよ死亡フラグって。俺が死ぬって言うのか」

「気を付けろって事さ。好時魔多しと言うだろ? 来年の事を言う
と鬼が笑うって言葉もあったな」

意味合いは違っのだろうが、この際だ。

2boyの話は予想外の展開ではあったが、おめでたい話だった。

だが、めでたい話で腹を満たして『ごちそうさま』とだけ言われる程に甘く無いらしい。

2007年4月10日

春……卯月。私の心は希望に満ち溢れていました……なんて事はあるわけ無い。

私が入校してから約4週間、一週間程前には第1術科学校の校長が交代していたこの日、同期が一人死んだ。同期と言っても術科学校の同期ではなく、入隊期別での同期である。

彼は舞鶴教育隊の第15期海曹候補士の第31分隊にいたらしい。術校の同期の中には同じ分隊だった者も幾人が居たようだ。

「まさか弔銃と45度の敬礼をする機会がくるとはな。得難い経験ってヤツか」

私は32分隊だったので直接の関わりはなかったが、それでも他人事とは思っていなかった。

他人の不幸は蜜の味だと言う。

ならば、胸の中に苦々しい思いが立ち籠めている私は、彼を他人として考えてはいないという事だ。

……だが、果たして苦々しい思いは彼の死を悼んでいたからであったのか？

死んだ『彼』はスクーバ課程に入校していた。

4月10日の午後4時頃から第1術科学校に接する瀬戸内海で潜水訓練を行い、1時間程訓練して【各人で解散】した。つまり、みんな適当にバラバラに上がったのだ。

午後6時頃。スクーバ課程の学生仲間が一人いない事に気付いた。散々探して潜水具が一つ足りていない事が分かり、慌てて探した。

『彼』は瀬戸内海の水深約10mの所に沈んでいた。陸に引き揚げたが呼吸も脈も無く、蘇生を試みたが戻らなかった。

苦いのはおそらく、自衛隊に対する思いだったのだろう。

ラッパの吹奏と弔銃発射が交互に3回繰り返され、2等海曹となつた彼は送られた。

「2階級特進か。死んじまったら昇進しても意味ねえぜ」

第1術科学校ではこの翌年、特警隊の隊員が『15人抜き』をやらされて死亡するのだ。

本当に学ばない組織だ。余つ程の馬鹿が揃っているのだろう。

「やる気出ないな……」

元より無いものは出しようが無い。無い袖は振れない。

カビ臭い自衛隊に相応しいゴミである私だが、いくらゴミでも命は惜しい。こんなポンポン人が死ぬ組織に居たくはない。

教務の内容は伏せさせて貰うが、私の成績が芳しくなかったという事は書いておこう。

座学の試験は週に2回から3回あり、さらに課業外に走らされたりする。そこにアイロンがけに清掃、ベッドメイクが加わる。やる事はいくらでもあった。無いのは私の中身のみ。

5月

私達学生は砲台山登山競技に向けて山間のミカン畑の道を走らされてきた。

本当ならば宮島の弥山登山だったかなのだが、数年前の大雨で土砂崩れが起きて道が崩れて復旧しておらず、それ以来は砲台山に変更されていた。

で、その競技の練習としてミカン畑の合間を走らされていたのだが、これが結構キツイ。

景色は綺麗で夕日も綺麗。だが、夕食の時間ギリギリまで走らせるのだ。

食事に行こうとしても、食堂に汗だくのジャージで行けば死刑なので入浴が先になる。そして、入浴してから食堂に行っただって喫食時間は過ぎている。

「食事の時間を潰してまで走らせても意味は無いと思います」

ある日、当直学生となった私は分隊付きに対して当直誌の提出ついでにそう言った。相手にどう思われてもいいと思った。自衛隊にどう思われても別に構わなかった。

私の心は既に、自衛隊から離れていた。

5月の下旬

試験での赤点（80点未満）が3枚を越えた私は呼び出された。
『赤点を3回以上取れば原則学生罷免』である。

「どうする？ まだ頑張れるか？」

分隊長は訊ねてきた。

他にも赤点を取っている人間はいたし、赤点が6回という者もいる事は知っていた。しかし、そういった人間は自衛隊に居たいと考えて頑張っていたが、私の心は自衛隊の方を向いていないのだ。

「頑張つてこの結果です。これ以上はムリです」

私は学生罷免を受け、退職する事になった。

「マジか。俺なんか『手続きに3ヶ月くらいかかるから艦に行つてから辞める』って言われたぜ」

廊下で偶然出会ったアザミンに退職することを話すと驚いていた。私はアザミンも辞めたがっていたという事実には驚いたが、士官室係りの時に『調理師免許を高校で取得した』『料理人になろうと思う』とか言っていた事を思い出した。

「学生罷免だからなあ」

「俺も面倒臭くなつたしな」

夜

消灯後にカップ麺を食すべく娯楽室に侵入した私は、何かが居る

事に気付いた。

「誰何3度に及ぶも返答無き場合……打つべし！ 打つべし！」

【ベシ！ ベシ！】

気の抜けた音を発ててジャブが炸裂する。

「痛！」

「……なんだ、ニコラスか」

それは毛布にくるまったニコラスこと2boyだった。

「ニコラスじゃねって！」

「いやさ、2boy。なーんしょーと？」

寝ているように見えるが、わざわざ娯楽室で寝ている理由が解らない。

「俺のイビキがウルサイって文句言われるから逃げてきた」

「そう言えばそんな話もしてたな」

2boyは序列が上の人間と同部屋になっていたのだが、その同部屋の人間にいびられているらしかつた。

「寝首でも掻くか。包丁なら有るし、探せばロープも斧も有るぞ」

毎年100人から死ぬ自衛隊だ。いまさら殺人が1件増えても問題在るまい。

「やめとくよ。あんなヤツ殺す価値もねえし」

「そっか。正しい判断だと思っよ」

私なら冗談で、柵から包丁を取り出す所まではやるが。

「んでさあ、二等は何やってんだ？」

2boyは私の手元を覗いた。

「晩飯を食おうと思ってな」
カップ麺を振りながら言う私を2boyは不思議な生き物を見る
ような目付きで眺めた。

「晩飯って、食堂で食ってねえのか」

「ああ。人が多い所は苦手だ。それに急いで食うのもな」

私は食堂に行かなくなっていた。PXにあるポプラというコンビニで弁当等を買って、PXの中や娯楽室でのんびりと食べる。体には悪いかもしれないが、精神には優しかった。

暫し沈黙

「ま、俺は先に逃げるけど、お前は頑張ってくれ」

「UZEEEEEE!」

ヘラヘラしながら2boyの肩を叩くと、2boyは雄叫びを上げた（深夜なので小声で）。

「あゝあ。二等もついに【うんこ製造機】になっちまうのか」

「【うんこ製造機】ってなんだよ」

術科学校に入ってから知り合った同期【ヒガシノ】が、女性自衛官のフィギュアを愛でながら溜め息をついた。コイツは弩の付くスケベだが、ロリコンでは無いのが救いだっただ。

ちなみに、ヒガシノへの土産に【それゆけ！女性自衛官】を買ってきたのは私だったりする。

「何って『NEET』の事だよ。二等は暫く再就職しないんだろ？
だったらニートじゃないか」

ニートは食っちゃ寝だけの生活なので【うんこ製造機】呼ばわりしているらしい。

「ううむ。確かに『ニート』なんて軽やかな言葉よりも【うんこ製造機】の方が合ってるな」

「だろ？　ところさ、『うんこ』って伏せ字になると大抵は『うんこ』だけど、『んこ』にすると他にも思い浮かんで素敵じゃね？」

「……」

前言撤回。

ロリコンでは無いのが救いだと思ったが、どう在ろうと変態は変態だ。救いなど無いな。

「ヲタに変態に無能な屑……自衛隊って相当ギャグだよな」
「何を今更」

まあ、良く考えると日本国の存在自体が怪しいので、それを守る自衛隊がギャグやフィクションであったとしても問題は無い。

【おまけ】
ここから先は本編とは関係無くも無い……と思う（んだけど、どうかなあ）。

『訓練』

第1術科学校では防火防水の訓練が有る。

防水の訓練施設は『鋼鉄製の壁に空いた穴から水が出る』というモノ。破孔の大きさは直径2センチと直径30センチ。直径2センチの破孔は、手斧を使って角材で木栓を作って塞ぐ。直径30センチの破孔は鉄箱を当てる木を組んで押さえる。結構本格的な訓練だが、実際の艦艇で戦闘中に出来るかどうかは……。

防火訓練施設は鉄筋コンクリートの建物。内部に居住施設を模擬してあり、そこに灯油を撒いて火を点けて訓練する。舞鶴教育隊にも似た施設はあったが、海士の訓練はオイルタンクに火を点けただけだったので、遥かに実戦的ではある。

警備の訓練も行う。

警棒の扱いや構え、盾の取り扱いも習う……が、正直言うと直ぐに忘れる。

陸警（戦闘）もする

教育隊でもやったが、ホフクとか。海自のホフクは第1〜第3までだが、陸空は第1〜第5までである。どうやら陸空で言う第1・第4・第5ホフクをそれぞれ第1・第2・第3ホフクと言っているようだ。

ちなみに、突撃の号令は『突撃に 前へ 進め』である。『突撃』で立ち上がったら、一人だけ目立って蜂の巣になるだろうよ。

『突撃に』 『前へ』 『進め』

分隊長のかける号令。

『突撃に』で榴弾を投げる。『前へ』でバツタの姿勢をとり、『進め』で立ち上がり銃を構えて突撃する。

走りながら撃ちまくるのが海上自衛隊式。立ち上がって短連射、5歩走って短連射……が航空自衛隊式。陸は知らない。

航空自衛隊式だと最後は走って行って突き刺して、四周警戒だけ

だが、海上自衛隊式だと……

奇声をあげて突撃しつつ撃ちまくる、弾切れになったら銃を銃剣格闘の持ち方に持ち変える。分隊長は『突っ込め』と叫び、分隊員も叫ぶ。敵陣に駆け込み、その勢いを利用して敵を刺突する。相手を蹴ったぐり、銃剣を引き抜く（普通に引いても銃剣が曲がったり筋肉が収縮していて抜けないらしい）。銃剣を引っこ抜いたら、銃床で殴り上げ、次に殴り下ろすと共に銃剣で斬り倒す（切れないから押し倒す感じで）。
止めとして体重をかけてぶっ刺す。

……という流れになっている。

甲板掃除

第1、第2術科学校は毎週金曜日の午後は大掃除をしていた。毎週毎週ワックスを剥がしてワックスがけ。……全館脱靴にしるよ。ワックスだってタダじゃねえんだぞ。

浴槽に苔や藻が生えるのはサボリじゃなくて仕様らしい。

資料

『陸奥』の主砲塔とかがありましたが、今は鳩の巣です。

『蛟龍』のハッチを開けたら、中にゴミの詰まったコンビニ袋が入っていたのには幻滅した。モラルなんて所詮はその程度か。

蛇足：二ト海士長と呼ばないで（後書き）

入校中の土曜日

私が兄に電話をかけていると、ちょうど0800になり、国旗を揚げる時間となった。

その時、兄は

『え？ 海自つて土日も旗を揚げるの？』

……航空自衛隊は土日は旗を掲揚しないのか！ カルチャーショック！

旗の掲揚ラツパが海上自衛隊だけ違うというのも、その時初めて知りました。

後から、『かしらなか頭中』の号令も航空自衛隊と海上自衛隊で微妙な違いがあることに気付きました。

海上『かしいーらあゝ、なかつ！』

航空『かしらあーっ、なかつ！』

もはや文化が違う。分科しすぎたか。

前書きでも言い訳をいたしましたでしたが、文章が下手で誠に申し訳ありません。

しかし、マトモな小説化が出来てしまつたら、この話はとんでもなく陰鬱な話になってしまうのではないかと……。そう考えると、

半端な能力で書いてるほうが被害は少ないのじゃないかな。

第15話：永決（前書き）

ついにこの時がやって来ました。

ズルズルと引き延ばされていたこのお話も、間もなく終わりを迎えます。

第15話：永決

2007年6月下旬

私は横須賀に戻っていた。

7月3日付けで退職を承認され、地方総監の名前で書類が出された。

横須賀に戻ってはいしたが、船越地区には行かず、吉倉側の補充部で2、3日過ごして物品を返納。退職者用の通門証を持って基地を後にした。

門には工原が居り、私が通門証を渡すと驚いた顔をしていた。

「え！？ なんで」

と、工原は訊いきたが、面倒なので適当に返してその場を離れた。

そして、数日を下宿で過ごし、その下宿も引き払って7月10日には実家へと帰った。

7月の後半だっただろうか。

私が例の如くXbox360でゲームをプレイしていたら、携帯が鳴った。着信は3等空尉からであった。

「なんだ？」

『よう、ボブ。今は何してる？』

「オブリビオンってゲーム」

この頃の私は自動車の免許を取りに自動車学校に行く以外には何もせずにダラけていた。

『……まあ良い。ところで。この前、東京湾を航行する艦艇がいたから識別したら『たちかぜ』って出たんだが』

「……」

まだ、生きていたのか

「S I F が生きてたんじゃないか」

『でも、除籍だろ?』

「じゃあ、他の艦艇が識別信号を受け継いだんじゃないの?」

私は背中に冷水を浴びせられたような気持ちになった。夜道で幽霊に出会ったような、そんな気分だ。

私は少しだが『たちかぜ』の事を調べた。意識して忘れようとしていたが、気になるモノは仕方ない。

調べて見た所、標的として沈めるのは平成23年だと思っていたが、もっと早いらしい、という事だけがわかった。

【補足説明】：識別

『IFF』：IFFという名前は皆さんご存知だろう。これは敵、味方の識別に使用される。用途は軍用、質問モードは『特通M型』
Ⅱ『モード4』である。まず、暗号化した質問信号を発信し、目標が暗号を解読して応答信号を返し、それが友軍同士で決められた信号と一致すれば味方。応答はあるが、信号が一致しなければ不明。目標が暗号を解読出来ず、応答が無い場合は敵となる。では、IFFが故障した場合はと言うと、IFFの故障を通信で伝達し、S I F の出番である。

『S I F』

T I (T r a f f i c I d e n t i f i c a t i o n)とも呼ばれる。軍民共用の航跡識別。質問モードはモード3(モード3/A)。

SIF信号を『【検閲により削除】』にするとIFF故障という意味である。また、『【見せられないよ】』であれば、ハイジャックされているという意味である。

モード3とモード4があれば、当然モード1とモード2があるわけだ。『モード1』はSI(Security Identification)と呼ばれる軍用識別で、任務識別に使用する。『モード2』はPI(Personal Identification)と呼ばれる軍用識別で、個別識別に使用される。

……口直し終了

2009年6月1日

神奈川県横須賀市、海上自衛隊船越基地。

標的艦の艦魂が自らの艦橋から岸壁を見下ろしていた。その姿は余りにも儚くおぼろで、だからこそ印象的で美しかった。

『たちかぜ』は美しい船だった。

「……妹が名は 千代に流れむ 姫島の 子松が末に 苔の生す
までに」

ポツリと呟いた詩は、標的艦としての改装を受け、船越に戻って来た時に『ちよだ』から渡された手紙に書かれていた和歌だった。

『ちよだ』が『たちかぜ』に対して恋心を抱いているという話は有名な【噂】だった。『たちかぜ』はそんな噂も『ちよだ』から向けられる熱の籠った視線も華麗にスルーしていたが、結果的に精神

を病んだ『ちよだ』が【体当たりの恋愛】に走り、『たちかぜ』の内火艇を撃沈するという結末に至った。

船体に計測用の白線を引かれ、所々に赤いマーキングをされた『たちかぜ』を引き出す為に、曳船『86』、『87』、『89』は吉倉地区から掘り割りを抜けて船越地区に入った。

「最期の瞬間まで艦として扱われるというのも、運が良いのかもしれませんし、ね」

通常、自衛艦は除籍された後は解体されて資材となる。その場合は除籍された時点で艦艇ではなくなるので、艦魂は存在していらなくなる。

だが、『たちかぜ』は違う。

『たちかぜ』には除籍後も標的艦としての任務が与えられた。これにより、艦本体の沈むまで『たちかぜ』の魂はこの世界に存在する事となった。国を護る意志を形にしたような護衛艦の魂にとり、それは幸運と言えたかもしれない。……その運命を自分から望んでいたのなら、の話のだが。

『たちかぜ』が岸壁を見ると、懐かしい顔がチラホラ見えた。

初めてミサイル発射試験を行った時の砲雷長に、元護衛艦隊司令官。彼等も一目『たちかぜ』を見ようと駆け付けていた。

『たちかぜ』は方位盤も無くなり、砲身も撤去されていた。その姿を目の当たりにし、涙ぐむ元・乗り組み員も居た。

既に闘う能力は無い。だが艦艇としての容かたちが残されている事かつに嘗

ての栄光が思い起こされ、現在の侘びしさを増す。

舷に塗られた、華やかにすらおもえる計測ラインや赤いペイントに、死化粧という言葉が思い起こされてしまう。

やがて、『たちかぜ』は曳船に引き出され始め、岸壁にならぶ人は帽振れで見送る。

岸壁から見守る人は、二度と戻らない航路たひじへと出航する『たちかぜ』を、いつまでもいつまでも見送っていた。

港外では『げんかい』と『はしだて』が警戒に当たっており、『たちかぜ』が姿を現すと艦魂が敬礼した。

『たちかぜ』を曳航する『えんしゅう』はまだ見えず、しばらく漂う。その時、偶然か狙ってか、『たちかぜ』の従姉妹にあたる『はたかぜ』が水道を駆け抜けた。

礼装に身を包んだ『はたかぜ』の艦魂が敬礼し、『たちかぜ』もそれに答礼した。『はたかぜ』が姉貴分の最後に対して、どんな思いを抱いていたのかは、知る術も無い。

遅れて（それでも予定よりは早く）現れた『えんしゅう』が曳航の支度をしている間、『たちかぜ』は『ちよだ』からの手紙を読みかえしていた。

「妹が名は……千代に流れむ……」

『たちかぜ』は、自分の名を永遠に覚えていて欲しかった。三十年という長きにわたり仕えた国に。僅か三十年だが、自分の人生で愛し続けた国に。

（もしも、生まれかわる事ががあるならば、また日本に生まれたい

ですね)

生まれ変わってもまた日本に生まれたい。自分が生まれ変わるまで、日本に存在していて欲しい。次は、三十年といわず、300年だって見守っていたい。

『たちかぜ』はそう思った。

やがて、曳航準備がととのった『えんしゅう』に曳かれて、『たちかぜ』は水道に入った。

水道に入った途端、身を引き裂かれるような痛みが『たちかぜ』を襲った。

痛みを堪えながら『たちかぜ』は長年過ごした東京湾を見やった。

「愛しています……」

生まれた時から『たちかぜ』には日本を愛しているという自覚があった。それは幸運なことでも不幸なことでもなかった。『たちかぜ』にとっては当たり前なことだった。

日本国と『たちかぜ』の関係はそれだけだった。艦魂と国との間に、理論など存在しなかった。

2009年、6月の末……

沖縄の東、海上自衛隊がし海面と呼ぶ海に、潜望鏡が1本突き出

ていた。

潜水艦の艦長は接眼部から顔を離すと、副長を呼び寄せた。

ストップウォッチ片手に潜望鏡を覗き込む副長に、艦長が話しかける。「副長、あれが護衛艦だ。ミサイルを3発喰らっても沈みはしない」

「凄まじいです、艦長」

潜望鏡の狭い視界の中で、船体を引き裂かれ、舷側には構造物の一部だったであろう鉄板をダラリと垂れ下げた『たちかぜ』の姿が、副長の目に飛込んだ。爆発物を積んでいない艦は、炎上してはいたが沈む心配はない。

水上艦艇の打たれ強さに舌を巻いている副長に、艦長が指示を出す。

「我々の出番までは時間がある。交代で全員に見せてやってくれ」
「了解」

副長は近くにいる手空きの者から順番に潜望鏡を覗かせた。

『たちかぜ』艦橋トップ

真っ赤に染まる視界に、『たちかぜ』は日が暮れかけているのかと思った。しかし、頭が働き始めるにつれ、それが夕陽に染まっているからでは無いのだと悟る。

(頸をやられたようですね……)

足を投げ出すように座り込み、背を方位盤の台座に預けた姿勢で状態を探る。

艦橋基部に誘導弾の直撃を受けていた。

アスロツク弾庫内で爆発したのか、弾庫の扉はどこかへ消え、爆
圧抜き孔の覆いが全て吹き飛んでいた。

塗料の焦げる臭いが鼻につく。

艦内のダメージは見た目より酷く、あちこちの隔壁が破壊され、
甲板がそこかしこで引き裂かれていた。それでも沈まない自身に驚
嘆しつつ、沈みにくいからこそ必要となる処置に絶望する。護衛
艦は原型を留めていれば、艦内の閉鎖状況にもよるが、沈むことな
ど殆んどない。その事は日本の艦船設計技術の巧妙さを現している。
厄介なのは、沈んだ標的艦を調べれば、艦艇の建造技術・性能、
使用した対艦兵器の性能が知れてしまうということだ。そのような
事態を避けるには、艦を完璧に破壊せねばならない。

ために、魚雷を使う。

魚雷をどてつ腹に受けると、薄っぺらな装甲しか持たない現代艦
は砕けてしまう。大破孔を生じ、急速に浮力を失って、水中に引き
ずり込まれるように沈むのだ。

「軍艦らしい最期ですけど、私には似合いませんね」 荒い息を
吐きながら呟くと、百葉箱の取り付け具に手をかけて立ち上がった。
特に理由は無いが、座り込んだまま消えたくはなかったのだ。

覚醒はしているが、うまく働かない頭で『たちかぜ』は考えた。

(最期くらいは格好をつけさせてもらいましょうか)

さて、どうやって格好をつけようかと考える『たちかぜ』は、右
30度方向に潜望鏡を見付けた。

潜水艦の発令所で、潜水艦の魂である少女が潜望鏡にかじりつい
ていた。

『護衛艦つちゆうのんはな、ええカッコしいやねん』

姉達の言葉が頭をよぎるのは、標的の不可解な動きのせいだろう。先程まで自分は、『たちかぜ』の右前方に占位していたはずが、今は『たちかぜ』の右正横に位置している。どういう原理か『たちかぜ』が回頭したのだ。

「ナンセンスだわ」

誰にも聞こえないような小声で潜水艦の魂は言った。

カッコをつけて何になる？ 華々しく戦い、華々しく散るなど理解しかねる。

戦場に華など不要。必要なのは、相手の息の根を止める一撃のみ。そう信じて今までやって来たのだ。

だが、目の前でカッコつけて沈もうとしている艦艇を見ると、熱いモノが込み上げてきた。

（これは、良くない）

口をへの字に結ぶと、潜望鏡から睨みつけるようにして『たちかぜ』を見る潜水艦の魂。そこに重なるようにして、艦長が潜望鏡を覗いた。

「……絶好の射点だな。海流の影響かな？」

艦長は標的の向きが変わっていることを不思議に思いつつ、雷撃の準備を終えさせた。

「閉鎖再確認よし。発射管注水よし、開口よし！」

「雷撃準備よし！」

各所から上がってくる報告を聞き、艦長は令を下した。

「攻撃始め。1番2番発射」

「了解」

艦長の声は少しだが震えていた。潜水艦の魂は、魚雷の発射ボタンを押そうとする水雷士の指が震えている事に気が付いた。

震える指で発射ボタンが押し込まれ、僅かだが船体が震えた。

魚雷は2本放たれ、『たちかぜ』の船腹を食い破った。

魚雷の威力は凄まじく、爆発の瞬間に『たちかぜ』は数メートルも浮き上がった。魚雷の炸薬の燃えカスと水蒸気、熱湯が混ざって水柱となり、その中で『たちかぜ』はV字型に折れ、捻れるようになりながら沈んでいった。

金属が擦れ、ぶつかると音や、艦内に海水が流入する音を立てながら、まるで空中から地上へと落下するかのような速度で沈んでいく『たちかぜ』。

沈んでいく間にも船体はバラバラに崩れ、艦内に残っていた空気が海面へと上っていった。

潜水艦の発令所は静かだった。

訓練の終了に安堵する溜め息は聴こえても、成功に歓声は無く、艦全体がしばらく放心していた。

「潜望鏡下ろせ、深度30、微速後進」

20秒も経ってようやく艦長は指示を出した。距離をとってから浮上するつもりだったのだ。

乗員は指示に従って動いていたが、誰も何も喋らず、まるで通夜のようだった。

距離を十分に取ってから浮上し、潜水艦艦長が『たちかぜ』の浮かんでいた海面を確認すると、僅かな油と、錆や塗料の粉が浮いているのだけが確認出来た。

『たちかぜ』は、沈んだ。

平成21年6月上旬、『たちかぜ』は太平洋上で標的艦としての任務を全うし、海中に姿を消した。

ここに、一隻の艦艇の物語は終わったのである。

なお、元乗員の「沈めてしまうにせよ、われわれの心の記念として何か残したい」との声を受け、『たちかぜ』の錨が開発隊群庁舎前に設置されたほか、戦闘システムのコンピューター操作板も資料として同庁舎内に展示された。

『たちかぜ』がアメリカで行った初のミサイル発射試験に砲雷長として参加した大熊元将補は6月1日の見送りに参加し、

「海上自衛隊デジタル化の幕開け時代に、『たちかぜ』は多数のミサイル術科に関わる隊員らの錬成道場となった。最後の勇姿を私が導入にかかわったイーリス・システムを伝授した教え子たちとともに見送ることができ、良き時代に最高の艦の乗員であった誇りと幸せを全身で感じる事ができた」と語った。

第15話：永決（後書き）

海という存在は何処にでも繋がっているらしい。人の心にすら繋がっているらしい。流星は『母なる』を冠するだけはある。

「ならば、『たちかぜ』の所まで行けるかもな」

何をトチ狂ったのか、二等海士長は日本海に飛び込んだ。

だが、泳力未熟者の証しである赤帽を被っていた二等海士長は太平洋まで泳げる筈もなく、それならば溺死してあの世で『たちかぜ』と再会しようかと思っても、生き意地の汚さ故か、気が付くと浜辺に打ち上げられていた。

トポトポと砂浜を歩く二等海士長の背後に、『E1767/フレンドリー』の飛魂が降り立った。

「作者さん……」

潤んだ瞳で作者を見つめながら、『フレンドリー』は言った。

「作者さんのこと、私だけの名前で呼んで良いですか？」

「え、何だ？」

ドギマギしながら訊く二等海士長に、『フレンドリー』は……

「作者さんのこと、『左翼ゲリラ』って呼んでも良いですか？」

作者

「何だよ【左翼ゲリラ】って!？」

『フレンドリー』

「だって作者さん、左翼でゲリラって感じじゃないですか」

S原

「確かに、二等は自衛隊を敵に回しているからなあ」

いつの間にか現れたS原土長までが、左翼左翼と連呼する。

作者

「何を言う！ 俺は左翼などではない！ 俺は中立の愛国者だ！！」
カッコ良く言ったつもりな二等だったが、【ナポレオン〜獅子の時代〜】のパクリなので、誰も痺しびれたり憧れたりしなかった。

S原

「散々自衛隊をこきおろして、身内の恥を晒しておいて『中立の愛国者』だと？」

作者

「いや、それはその、愛するが故に許せないと言いますか……」

『フレンドリー』

「そんな、ツンデレぶっても駄目ですよ」

作者

「ツンデレじゃなーよー」

S原

「にしても、お前も魂とか愛とか生まれ変わりとか好きだねえ」

作者

「絶望した！ 代わり映えの無い自分の作風に糸色望した！」

『フレンドリー』

「絶望先生ネタも、もういいですから。……そう言えば、生まれ変わりとか輪廻転生って魂のリサイクルですよね」

作者

「リサイクルってえか、リーンカーネーションな。筋肉少女帯が……」

『フレンドリー』

「まあ、それは置いておいて、再利用ならキッチンと分別するべきではないでしょうか？」

作者

「分別？」

二等海士長は首を傾げた。

『フレンドリー』

「そうです、分別です。『たちかぜ』さんは燃えて萌える魂で、艦魂の皆さんは大抵【萌える】でしょう？」

S原

「んじゃあ、コイツは？」 S原士長は二等海士長を指差した。

『フレンドリー』

「粗大ゴミ、もとい、粗大魂じゃないですかね」

S原

「いや、むしろ埋め立てだろ」

作者

「何だよ、『穴掘って埋まってるさうさ』とか言えってか？」
某アイドル育成ゲームが二等海士長の頭をよぎったが、『フレンドリー』は首を横に振る。

『フレンドリー』

「違いますよ。埋め立て『られる』のが普通じゃないですか」

そう言いながら二等海士長の背後に向かって微笑む『フレンドリー』。

二等海士長が恐る恐る振り返ると、そこには……

作者

「絶望した！ 絶望先生ネタはもういいとか言いながら、積極的に使ってくるキャラクター達に絶望したっ！」

『フレンドリー』

「私はむしろ、作者さんの独創性の無さに絶望しましたけどね」

S原士長

「さて、次回は後書きのな物を書かせて頂きます。舞台裏的な物です。本編はこれにておしまいです。」

「ここまで読んで下さり、ありがとうございました。」

後書きのようなナニか（前書き）

登場人物

【作者】：
現在の二等海士長。別名『左翼ゲリラ』『ニート海士長』『劣等』。
基本的に馬鹿。酒と煙草が苦手。

【二等海士長】：
過去の作者に艦魂が見えるという設定をプラスした。甘いモノが苦手（マンジュウ怖いな意味で）。

【S原士長】：
サディスト。サディスティックな嗜好を満たそうと自衛隊に入るが、全然満たされなかつたため退職している。

【一等空士】：
作者の知り合いの航空自衛官。携SAM射手だが、VADSも扱える。

『フレンドリー』：
航空自衛隊の誇る『E1767（早期警戒機）』の飛魂。別名『大皿』『空飛ぶ電波さん』。

【前書き】

艦魂が見える人間達の行動を観察すると、いくつかの共通点があ

るようだ。

1：男のくせに女モノのシャンプーを使う

シャンプーやボディソープを艦魂と共有している可能性があるぞ！
中身の減りがやたらと早ければ『ビンゴ！』だ！

2：よく携帯で長電話している

携帯で電話しているフリして、目の前の艦魂と会話しているかもしれないぞ！
艦魂が見えない人から見ると、普通に艦魂と話していたら『独り喋りをする可哀想な人』に見えるからな！

3：寄港地で土産をやたらと買う

宅配便で送らずに、艦内に持ち込む奴は艦魂への土産を買って来ている可能性が高い！
注意しろ！

周囲を注意深く見るのだ！
艦魂を見える人間は意外と近くに潜んでいるぞ！

後書きのようなナニか

完結式会場

車止めに朝鮮動乱時代からタイムスリップしてきたかのようなボンネットトラックが止まり、荷台から一等空士が顔を出した。

下半身を地面に埋められた作者と、S原土長と二等海土長はすでに杯を手に行っている。

「遅い」

イラ立ちを隠さずにS原土長が言った。

「現役には色々あるんだよ」

一等空士は『あなた達とは違うんです』という首相な態度で言った。

「福田かよ」

「首席宰相乙」

大地との一体感を悦び、新たな地平へと向かいつつあった作者を掘り起こしながら、三人は文句を垂れた。

「弾薬の陸揚げはF-10でやっただろ。そんな事も忘れたのか？」と、二等海土長

「俺はサドじゃねえぞ、このサヨク！ブタ！人格分裂！」と、S原土長

「俺の話は何処に行った？」と、一等空士。

作者はなじられながら『フレンドリー』が差し出した杯を受け取った。

「まあまあ、めでたい席ですし」

『フレンドリー』はそう言うが、小説の内容がアレなので、誰もめでたいとは思っていなかった。

「完結おめでとう、というべきかどうか迷うな」

「とりあえず、乾杯だけはしとこうぜ」

一等空士が浜松で買って来た【花の舞】という酒を注いでまわる。

「この盃を受けてくれ なみなみと注がしておくれ」

花に嵐のたとえもあるぞ

さよならだけが人生だ

「勸酒だったか」

酒を注ぎ終えた一等空士が作者を見ると、作者は深いため息をついた。

「楽しく語り合う時間は大切にしないと。……その時間が過ぎ去ったとしても、出会った事も、別れた事も無駄にはするまい」

作者は杯を高く掲げた。

「乾杯しよう。『たちかぜ』が愛した国に」

「作者は慣れない酒を一気に煽った。

「さて、酔った勢いで色々……吐き出そうか」

胸の内を吐露ではなく、腹の中身を嘔吐しそうな作者を慌てた『フレンドリー』が連れて行く。

「大丈夫なのか、あれ」

「俺は知らん。おい、二等」

S 原士長は二等海士長を呼んだ。

「作者がいないから、お前が仕切れ」

「了解。んじゃあ、オミットしたエピソードを並べてみますかね」

【オミットしたエピソード】

2006年

1月～2月、FTGの検閲。

2月、呉入港。勝連（沖縄）入港。

5月、ドック入り

7月、鹿児島入港

8月25日、仙台で一般公開。

「1月～2月のFTGの検閲ってのは、準備や訓練も含めてだ」

出入港の作業を検閲されるのだが、検閲前に出入港訓練を行った。

「その訓練は日帰りが主なんだが、伊東（静岡）沖に錨泊してた事もあってな。パタ士長と一緒に温泉に入ったりもしたよ」

伊東には入港出来なくて錨泊だけなのだが、その理由について一つ噂がある。

昔々は護衛艦は錨泊ではなく、入港出来たらしいが、『見張り用の12倍双眼鏡で露天風呂を覗いている』という噂が立った為、入港はしなくなつたというのだ。

「FTG自体は……ヤバイの一言だな。ねえ、S原土長」

「ああ。『たちかぜ』のベテラン海曹が小僧扱いだからな」
「恐いのなんのって」

5月のドック入りでは、食堂と調理室のアスベスト除去も行った。

「あれ？ この時だつたか」

「多分ね。今考えると、アスベスト除去つても撃沈する準備だつたんだな」

沈めた後で、近海に影響を与えないように除去したのだろう。

「ふーん。アスベスト使つてたなんて、流石に古い船だな」

一等空士は興味無さそうに言った。

7月の勝連入港では、隣に着いた『きりしま』が態勢を上げていて、全員が88式鉄帽とカボックを着用していた。ウイングに立っていた海曹がミニミを吊っていたのが記憶に残っている。

「確か、内火艇がトランシーバー落としたとかいって」

「港の部隊に引き揚げてもらったんだよな」

暗号やらなんやら入っているので、絶対に探し出さないとイケなかつたらしい。

「へえーそうなんだ」

盛り上がる二人をヨソに、一等空士は暇そうにしている。

仙台入港については、一般公開で600人くらい乗せた。

「いやあ、太平洋戦争で駆逐艦が陸兵500人乗せたとかって話を聞いて、そんなに乗れるのかと疑問だったけど、乗れるもんだね」
「けっこう余裕あったしな」

三陸沖では嫌な思い出として、冬場に通ると、戦闘システムの冷却用空気を冷やす水冷装置が凍りつく事があった。冷却水に海水を汲み上げて使用していたためだ。

「懐かしいなあ。氷を溶かすために中を開けたら、すんごく海水臭かったつけ」

思い出話は尽きない。

と、そこに作者が戻って来た。

「そ、そのエピソードは……艦魂を絡め難いからやめたんだ」
悪酔いの為に顔が真っ青な作者に、S原士長が言い放つ。

「どうせ、書き忘れてたんだろ」
作者の忘れ癖はいつもの事だった。

「他にも、術科競技とかあったけどね」
術科競技【サンドレット投擲】というモノがあり、これは30から40mの間隔をあけて航行する艦艇同士で、サンドレットを投げ合う競技だ。

「海士が艦首から身を乗り出してサンドレットを投げるんだが、見てる方も怖い」

その競技中、距離を詰めてくる相手艦が流していた応援歌が何故か【阪神タイガースの歌】だった。

「あと、退艦者が見送りの時に流す曲に、北斗の拳の曲を選んでいたり」

結構無茶をやるもんだ。

【その他の『たちかぜ』伝説】

古参の海曹いわく、『たちかぜ』は進水式の時に船底を船台に擦ってしまい、その傷が元で【護衛艦隊旗艦】という動きの少ない役職に就いた、という話がある。

山本土長いわく、『たちかぜ』が船越F110停泊中、『ちよだ』が艦尾に突っ込み、艦尾に係留していた内火艇を真つ二つにして沈めたとの事。

「進水式の話はかなり昔の話で、事実関係の確認が取れなくて小説には反映させてない」

「『ちよだ』の突っ込んだ話は【体当たりの恋愛】とか言ってたよな？」

一等空士が15話を見ながら訊く。

「ああ。私の一年先輩である山本土長が体験したそうだから、信頼性は高い」

内火艇がクッションとなり、『たちかぜ』も『ちよだ』も無事だったと聞いた。

「そういえば、何か資料を発掘したな」

思い出すように言った作者が、懐からプリントの束を取り出した。

【蒸気機関概要】

「この冊子は、初任海士教育で使用したものだ。これに書かれている覚え書きによると」

『たちかぜ』

ディーゼル発電 1800回転×2

非常用発電機2台 450V、1500W

サイクル 60Hz

モーター 3層交流電動機

1600KW

6万馬力12軸

回頭時片軸13万馬力

タービン：シリーズパラレル

ギア：ロックドドライ

ボイラー 2胴水管式ボイラー

蒸気圧力、40kg

蒸気温度、450度

燃料1軽油2号

満載量 1100kg

浄化器（真水精製器）1日45t×2

「だ、そうだ」

「ロックドドライ？」 蒸気機関は素人な一等空士は何が何だか分からないようだ。

「ロックドドライは不明だ。ロックドトレイン型減速装置の事もしれん」

ちなみに、他の艦型についても少しだが載っている。

各項目の後に『たかつき』型、『はるな』型、『たちかぜ』型、『しらね』型、の順に記す。

排水量(t) : 3050、4700、3900、5200

速力(kt) : 32、32、33、32

蒸気条件(kg/摂氏) : 40/450、40/480、40/450、60/480

出力(PS) : 6000、7000、6000、7000、7000

主軸回転数(MAX PPM) : 340、300、340、300
タービンの種類: CHL、CHL、CHL、CHL

主減速装置: ロックドトレーン、ロックドトレーン、ロックドトレーン、ロックドトレーン

巡航減速: なし、S/P、S/P、S/P

巡航かん脱装置: 直結式、なし、なし、なし

注: CHL: C 巡航タービン、H 高圧タービン、L 低圧タービン

S/P: シリーズ/パラレル

蒸気の流れ: 巡航時 CT HT LT

高圧時 CT LT

高圧時 HT LT

「何のこつちや」

「減速装置

蒸気タービンは高速回転させることにより、重量容積を小さくできる。これに反しプロペラは高速回転させると効率が低下するだけではなく、あまり高速になると……」

「アー、聞こえない聞こえない」

理解出来ないので、一等空士は聞くのをやめた。

「デアレターとか復水器の概念図とか載ってるんだが、私は理解出来ないね」

「艦艇の設計って大変だよな。【鋼鉄】が如何に何も考えなくて良いのかが、良く分かるよ」

まあ、アレはシミュレーションじゃないし。

「【鋼鉄】って言えば、作者は【鋼鉄】とか【提督の決断】はやるの？」

S原士長が訊くと、作者は首を斜めに振った。

「【鋼鉄】はやってるけどね。【提督の〜】は一時期出来なくなっていた」

「ちょうど、俺の頃だな」

二等海士長が作者の後に続けた。

「『たちかぜ』との別れの時は、本当にツラくてなあ。【鋼鉄】は沈んだ艦艇も復活するけど、【提督の〜】は復活しないからなあ」
だからってゲームが出来なくなるっていうのも、おかしいと思うがな、と、作者と二等海士長は自嘲気味に笑った。

「そつえば」

黙っていた『フレンドリー』が会話に参加した。

「新たに建造されたDDHはどうなんですか？ 作者さんの好きな『いせ』ですよ？」

『フレンドリー』に対し、作者は首を横に振った。

「私が好きなのは航空戦艦『伊勢』だ。名前が同じだからってDD

H『いせ』は別に好きではない」

ちなみに、作者が名前から好きになった艦艇は、旧日本海軍の駆逐艦『太刀風』（『たちかぜ』と同じ名前）と、空母『神鷹』（元の名前が『シャルンホルスト』）である。

「DDHって、確か22とか24つても計画されてるらしいな」
過去の人間である二等海士長が訊ねた。

「ああ。まだ名前も決まらんかな」

「設計すらまだだ。名前なんて気が早い」
作者とS原士長が答える。

「そうか。どんな名前になるのかな」

「さあな」

「俺は『あまぎ』『とさ』だと思うよ。建造出来たら儲けもの、計画中止でも名前が名前だけに仕方ないと諦められる」

S原士長が唇をクツと歪ませながら言った。

「おいおい」

「計画中止は言い過ぎだが、建造しても載せる航空機が無いしなあ」
皆の視線が航空関係の一等空士に集まる。

「ん？ 何だよ」

「航空関係の話ってどうなってる？」

作者に尋ねられ、一等空士は皮肉っぽく笑った。

「最悪の予想だと、5年後には、自衛隊機の稼働率は0になるって言われているな」
ちなみに、政権交代前の話である。

「企業側は生産ラインの設置・維持費用がかさんで、赤字が出ちま

う。……調達数が少なくて、な」

大量に購入すれば良いのだろうが、そんな金は自衛隊には無い。

このまま行けば、2015年に日本の領空は“周辺国”に【解放】される事になりかねない。

「『F-1X』はどれが良いか、何て議論より、国内に生産出来る企業があるかどうかを考えなきゃな」

下手すれば全機輸入なんて事になりかねない。そうになると、故障時の修理、保守整備にかかる時間とコストは跳ね上がる。

「そして、調達数は少なくならざるをえず、我が国の防空は弱体化する」

制空権を確保出来ないのならば、航空作戦全般に影響が出る。

「空自による近接航空支援、海上航空支援、航空輸送等々、制空権あればこそその作戦は不可能になる」

航空自衛隊だけではない。物品の移動を陸路に頼る3自衛隊全ては、空爆に晒されてしまう。

「制空権を喪った軍がどんな末路を辿るかは、第2次大戦でよく分かっているだろ」

「悲惨だね」。2004年以降、防衛費は削減されていたからなあ」

「自衛隊が大規模な戦闘をやることはなかったからなあ」

スクランブルしたイーグルが、領空侵犯機から機銃の照準レーダーの照射を受けたりという【臨戦】は良くあるのだが。

とりあえず、言っておこう。

「絶望した！ 対応できる能力を持っている時は起きなくて、対応能力を喪つてから起きる有事に絶望したっ！」

「じゃあ、俺も。」

絶望した！ 今は平和だからって、将来への備えを疎かにする

や に絶望したっ！」

「ついでにも一つ。相手が弱つてから牙を剥く国際社会のしたたかさ絶望した！」

かつてに絶望する作者と二等海士長を見て、『フレンドリー』はあきれた。

「そんな事言つたら、軍国主義とかつて叩かれますよ」

「有事に備えるのが軍国主義なら、警察や警備会社は犯罪組織の元締めで、消防は放火魔、地震に備えてる家庭は地震を望んでいるって事になるわな」

そんな馬鹿な話があるか。

「自衛隊は予算とか憲法等、いろいろ問題があるな。いつそ憲法改正して、核兵器を保有するべきか？」

S原士長が言うが、作者はしらけた顔をした。

「核兵器？ そんなもの持とうとしたら、私は国会に殴り込むぞ」

たとえ神が赦そうと、日本以外の国が核兵器を保有しようと、日本が核兵器を保有する事は許容しかねる。

「作者さんって潔癖症ですか？」

『フレンドリー』が訊き、作者が答える。

「いや別に。一番近くにある核兵器保有国の元首の、一面構えが気に食わないっただけだ」

坊主憎けりや袈裟まで憎い

「でも以外ですね。作者さんって改憲派だと思ってました」
『フレンドリー』が意外そうに作者を見る。

「私は右翼だからな。憲法九条に手を出すなんて畏れ多い」
「「なんで」ですか」

一等空士と『フレンドリー』の声が重なった。

「良く考えてみる。【憲法『九条』】だぞ。『九条』！」

「はあ、九条……。きゆうじょう?」

九条 きゆうじょう ……

「まさか、宮城?」

「そ。右翼の私としては、皇室は畏敬の対象であるからして、
ゆうじょう【】をどうこうするなど畏れ多いのだ」 【き

・
・
・

「くっ、くだらねえ」

「この腐れサヨクは……」

S原土長の言葉が、その場にいる全員の心を代弁していた。

【終わりに】

まるで海に溶けていくようだ

かつては自らの体であった船体が崩れ、沈んでゆく中で『たちかぜ』の意識は漂っていた。

このまま漂っていたい

そう考えながら、この海に溶けるのならば、それも悪くはないと思えた。

やがてその曖昧な思考も薄れ、溶けるようにして消えた。

人を愛し、国を愛した魂は、日本の海に溶けて消えた。

一つの魂の物語は、ここに終焉を迎えた。

いつの日か、その魂が海を廻り再びこの国に帰還するのだろう。いつの日にか、この国で再び出会う為に

『たちかぜ』と二等海士長くDDG168『鋭き剣』く

完

後書きのようなナニか（後書き）

【『たちかぜ』の除籍記念品】

『たちかぜ』の除籍記念の品として、いく種類かの物品が販売された。

『ワイン』 『腕時計』 『上陸札』

ワインは3500円程度の安いワインで、瓶に『たちかぜ』の姿が刻印されていた。

腕時計は1万2千円程。残念ながら中国製。

上陸札……レプリカ。値段は700円くらいだったか。自分の名前、階級、分隊、配置、部舷（右・左とA～D）が、書かれている。

約10ヶ月に渡り、拙作にお付き合い下さりありがとうございます。しました。

ファンタジーという類別にこのような作品が混じっている事に、困惑された方もおられるでしょうが、内容的に戦記ではなく（某所では『戦記』扱いされているようですが）、最も近い区分がファンタジーでしたのでファンタジーにしました。

しかし、この作品は“事実を元にしたフィクション”ですので、作中の二等海士長が直面した悩みは、実際に自衛官が悩んでいた事です。

自衛官の大半は、自らの存在が憲法で否定されている戦力である

と考えています。

違憲のそしりを受けてでも守る力が欲しいと、そう思う人間がいる。彼等が守るべきモノを守る事を、胸を張って誇れる日が来るように努力していきたいと思います。

……うゝむ、やはり真面目なのは私には似合いませんね。

実は、私のペンネームの二等は、私の人間性が二等品である事と、『たちかぜ』の部隊章の【交差する二本の刀】から来ています。二本の刀＝二刀＝二等です……。と、書いてる途中で考えたんですが、如何でしょう？ 刀二本で日本刀、とまでは言いますまい。

最後にもう一度、私から読んで下さった皆さんに、お礼を言わせて下さい。

読んで下さり、本当にありがとうございました。また何処かでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7294f/>

『たちかぜ』と二等海士長～DDG168『鋭き剣』～

2011年8月26日23時39分発行